

41778

教科書文庫

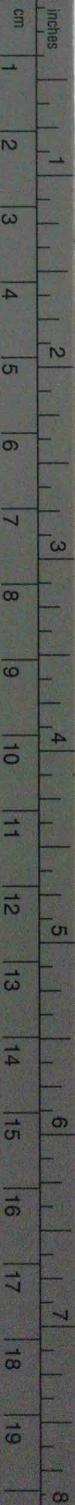
4
810
41-1930
20000 67118

Kodak Gray Scale



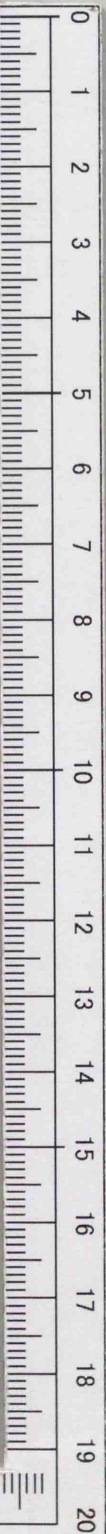
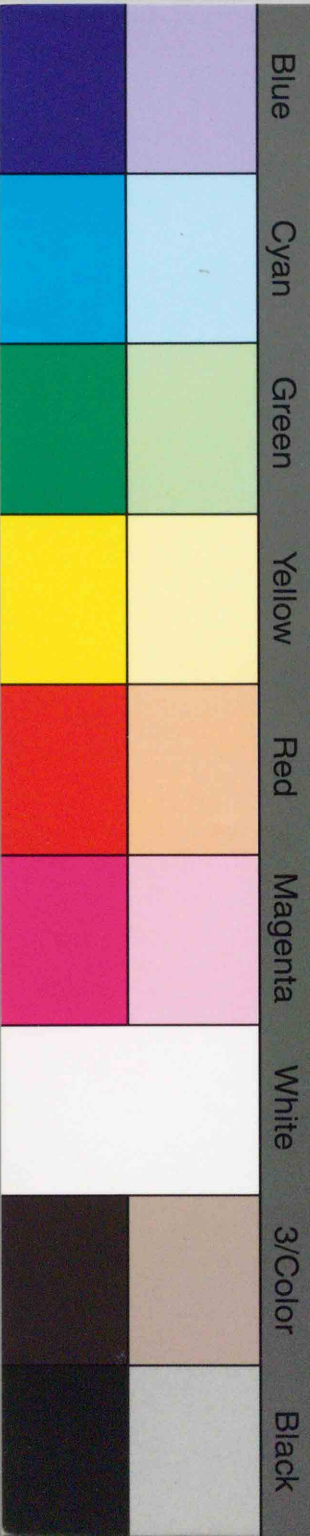
© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4a
810
AB5

國文選卷十



資料室

昭和五年十一月二十八日

文部省檢定

中國語科用

國

文

選



東京高等師範學校教授  
垣内松三編

42  
810  
BB5

- 一 縦に學年を貫き横に學期に亙りて特に全篇の組織に留意せり。
- 一 文化と國語との關係を基本として國民精神の涵養を意圖せり。
- 一 教材の選擇に關しては作品の本質と學習の態度とを考慮せり。
- 一 原作の更改は教科書としての用意に出づ原作者の諒恕を乞ふ。

目次

一 元祿文壇の三偉人……………藤井乙男……………四

二 幻住庵記……………松尾芭蕉……………三

三 馬方三吉……………近松門左衛門……………七

四 水戸の學風…………………………七

五 百蟲譜……………横井也有……………四

六 柳生宗矩……………新井白石……………五

七 芳宜園大人の靈を祭る……………村田春海……………五

八 芳流閣……………瀧澤馬琴……………三

九 史劇について……………坪内逍遙……………七

一〇 ハンニバル……………矢野龍溪……………七

一一 新しい詩の生誕……………高須芳次郎……………六

一二 山路……………夏目漱石……………六

一三 高瀬舟……………森 鷗外……………三

一四 春を待ちつゝ……………島崎藤村……………三

一五 人生の目的……………三宅雪嶺……………三

一六 文化の威力……………得能 文……………三

附録 國文學形態史圖表

國文學年表 下

### 一 元祿文壇の三偉人

元祿時代は我が文學史中で最も光彩があり趣味がある時代で、種々の方面に人物の打揃うて輩出したことは空前といふべきである。中にも井原西鶴、松尾芭蕉、近松門左衛門の三人はその尤である。三人の中で、西鶴が一番年長者で、芭蕉はこれより二歳若く、近松は又芭蕉より九歳下であつたが、その事業の世に現れたのは殆ど同時といつてよい。此の三人が京・大阪・江戸と三方に分れ、それが又、小説・俳諧・戯曲の三方面に各革新の事業を企てて、いづれも立派に成功して、その歴史に新紀元を開いたのも面白い現象である。

芭蕉は伊賀國上野の城代藤堂良精の家臣で、その若殿良忠の近習であつた。良忠は蟬吟と號して、季吟を師として俳

【參考資料】  
松尾芭蕉の研究には、

萩原井泉水「旅人芭蕉」  
同「續旅人芭蕉」  
小林一郎「芭蕉翁の一生」

萩原蘿月「詩人芭蕉」  
樋口 功「芭蕉研究」  
沼波瓊音「芭蕉全集」  
勝峯晋風「芭蕉七部集 定本」

日本俳書大系卷二・三・四  
俳諧文庫卷一・二・三  
俳諧叢書第一・二編

井原西鶴の研究には、  
鈴木敏也「西鶴の新研究」  
片岡良一「井原西鶴」  
藤村 作「上方文學と江戸文學」

近松門左衛門の研究には、  
坪内雄藏「近松の研究」  
藤井乙男「近松の研究」  
帝國文庫第四二・五〇編  
續帝國文庫第一三編

諧を學んだ。かういふ緣故で、芭蕉も早くから俳諧に親しみ、季吟とも知合であつた。寛文六年四月芭蕉が二十三歳の時、蟬吟が急病で卒去したので、芭蕉はその遺髪を高野山に納めた後、同年七月京に上り、季吟の門に學んだ。間もなく江戸に下つたが、一向思はしい事もなかつた。延寶二三年頃から、はほつゝ門人もでき、鯉屋杉風の世話で、深川の小庵に住むことになつた。これが所謂芭蕉庵である。延寶三年は江戸の談林派が黨勢擴張の爲に宗因を迎へ、談林十百韻を興行して、

さればこゝに談林の木あり梅の花 宗 因  
世俗ねむりをさますうぐひす 雪 柴

と凄じい意氣込であつた時である。随つて芭蕉も此の勢に捲込まれて談林を謳歌し、宗因の風を學ぶやうになつた。

木谷蓬吟 「大近松全集」  
水谷弓彦 「近松傑作全書」  
藤井乙男 「大近松全集」

季吟 北村季吟。國學俳諧に名あり。寶永二(二三六五)年歿す。年八十二。「一僕とほくありく花見かな」

鯉屋杉風 杉山氏。江戸の人。芭蕉の高弟。享保十七(二三九二)年歿す。年八十六。

芭蕉庵 深川區西元町一番地。六疊一間の家。談林十百韻 延寶三(二三三五)年、門人田代松意の招に應じて西山宗因が江戸に下りし時の千句。

宗因 西山氏。談林派俳諧の祖。肥後の人。大阪に住す。天和二(二七六〇)年歿す。年七十八。「白露や無別なる置所」雪柴 小坂井氏。談林派の俳人。江戸の人。

かくて江戸へ出てから十年餘りも過ぎた天和二年、芭蕉庵が焼亡したので、一時甲州路へ行脚したが、翌年門人ごもの好意によつて草庵が再建されて、再びここに落附くこととなつた。虚栗の撰集が出来たのはこの時で、これは談林から蕉風への過渡時代を代表する句集である。

貞享元年東海道を経て伊勢神宮を拜し、暫く故郷の伊賀に逗留して、大和より美濃伊勢尾張と旅行した。その紀行が「野ざらし紀行」である。此の年尾張で冬籠りして、同地方の門人等と興行した五歌仙を「冬の日」といつた。これは蕉風連句の開基として頗る注目すべきもので、此の年を蕉風獨立の紀元とすべきであらう。芭蕉は時に四十一歳であつた。その後引續き「春の日・曠野・瓢」などの集が出て、元祿四年「猿蓑」が出来た。これが蕉風の最も圓熟完成した時代を代表するもの

虚栗 二卷。天和三年、其角編す。翌四年、續虚栗集の撰あり。

野ざらし紀行 一卷。貞享元年成る。

門人 山本荷兮・岡田野水等。

歌仙 一卷三十六句より成る連句の稱。

冬の日 一卷。貞享元年成る。

春の日 一卷。貞享二年成る。

曠野 八卷。元祿二年成る。

瓢 一卷。元祿三年成る。

猿蓑 二卷。

である。かくて芭蕉は、同七年大阪滞在中に、五十一歳で痢を病んで歿した。

芭蕉は、一流を立ててから死に至るまでの十年間は、大抵行脚に出て、笠きて草鞋はきながら年を暮し、自然と同化して幽玄閑寂の思想を養ひ、一日も修養を怠らぬと共に、到處にその道を傳へて後進を誘掖したので、門人は天下に満ち、終に蕉風即ち俳諧俳諧即ち蕉風といふ有様となつた。貞門・談林の徒が遊戯視した俳諧は、芭蕉によつて極めて眞面目に嚴格な態度を以て取扱はれ、最早駄洒落や輕口・頓智のいひ放しでなく、詩歌と同等の内容をもち、それと對等の地位を占むるに至つた。宗因の、

世の中や蝶々こまれかくもあれ  
には輕快な浮世を茶化した一種の詩趣はあるが、芭蕉の、

七年 貞享七年十月二十日歿す。その病床の記(門人の著)を花屋日記といふ。  
笠きて云々 野ざらし紀行に「年暮れの笠きて草鞋穿きながら」

起きよ起きよ我が友にせん寝る胡蝶

に至つては眞摯な人情の温味が出てゐるではないか。

芭蕉は和歌連歌の因襲的趣味に囚れず、汎く詩材を求め、新に詩境を開き、和歌連歌に用ひられた材料でも一種新しい見方で鑑賞して、著しく俳諧の内容を變化せしめたのみでなく、形式に於ても、談林の無法則をも主張せず、さりこて貞門の法式にも拘泥せず、まづ一通りは法式に據るもの、必要に應じてはこれを打破して束縛に甘んじなかつた。前句に對する付け方も、貞門の物付けや談林の心付けを變じて、句響を以て付けることとした。即ち蕉風は前句の餘韻餘情を辿つて、即かず離れず一種幽玄な付け方をするので、ちよつと見るに兩々獨立して何等の關係がないやうであるが、よく味はふと其の間に微妙な連絡があつて、互に句ひ合

物付け・心付け 物付けは前句の事物に縁を引きたる事物を後句の骨子として詠込むをいふ。心付けは前句の思想に關聯せる思想を以て後句を付けるをいふ。物付け・心付けは共に前後句の關係密著に過ぐるを以て餘韻に乏し。

ひ響き合つて、何ともいへぬ微妙な趣が出るのである。

梅が香にのつこ日の出る山路かな 芭蕉

こころぐに雉子の啼き立つ 野坡

家普請を春の手すきに取りついて 同

かみの便りにあがる米の値 芭蕉

此の芭蕉の俳諧は、高雅であり、獨特の趣味の上に立つて居るから、眞にその趣味を解して之を味はふには、多少その道の修養を積まなければならぬ。芭蕉自身にも亦誰にでも分るご云ふことを望んで居なかつたので、たゞ少數の同趣味の具眼者と共に樂しまうごしたのである。暇つぶしの慰みにする俳諧、それもあつてよいけれども、自分のやる俳諧は決してそんな物ではないご云ふことを言つて居る。其處が餘程一般の聽衆や讀者を相手とする淨瑠璃や小説とは

野坡 福井の人。蕉門の高弟。元文元(二三九六)年歿す。年七十。  
芭蕉の句  
花の雲鐘は上野か淺草か  
草臥れて宿かる頃や藤の花  
古池や蛙飛びこむ水の音  
明月や池をめぐりて夜もすがら  
しづかさや岩にしみ入る  
蟬の聲  
猪も共に吹かる、野分かな  
ものいへば唇さむし秋の風  
初時雨猿も小籠を欲しげなり  
江かな  
古郷や賸の緒になく年の暮  
旅に病みて夢は枯野をかけ廻る

違ふのである。これを食物に譬へて見れば、雲丹かみすみと鮎脯あじりと云ふやうなもので、好きな人は何とも言へない乙おとこなものだおとこと云つて舌打をして喜ぶが、中には何處が旨いのかと云ふ人が随分多いのと同じである。殊に芭蕉が貴んだ幽玄閑寂おんげんと云ふやうな趣味は、晝夜算盤珠を弾いて損得に目角を立てて、偶骨休めと云へば酒色の外に出ない元祿時代の町人に、十分に理解されるべきものではなかつた。雲丹や鮎脯では腹が脹れない。そこでもう少し脂濃い、しつこい物で、誰にでも旨くて腹の脹れる牛鍋流の文藝が要求されるのは當然である。西鶴の浮世草子や近松の淨瑠璃が即ちそれである。

西鶴と近松との二人は、丁度芭蕉が連歌や貞徳派の俳諧の束縛を脱して新しい詩境を開いたのと同様に、これまで

の古い文章や古い型を破つて、端的に社會人間を寫さうと企てたものである。元祿以前の小説・戯曲と云ふものは、丁度貞徳派の俳諧が古臭い故事や諺を使つて氣の利かぬ洒落を繰返して居たやうに、室町時代から承繼いだ美しさうな極り文句を連ねた、極めて影の薄い活氣のない、感情も何も移らぬものであつた。これに反して、西鶴や近松は、借物でない自分の觀察と自分の文章とで、當時の社會や人間を寫したから、これまでのものは違つて、全く面目を一新した生氣潑刺たるものであつた。

徳川の天下も、元和偃武から打續く太平の餘澤に、文化も著しく進歩した。殊に三府の繁昌はこりぐであつた。江戸は將軍の膝下で政治上の中心、京都は禁裏のある處で文化の中心であつた。併し、金力に於ては到底大阪には及ばな

蕉門十哲の句  
夕立や家をめぐりて家鴨  
なく 其角(江戸)  
梅一りん一りんほごの暖  
かさ 嵐雪(江戸)  
叱られて次の間に立つ寒  
さかな 支考(美濃)  
欄干にのぼるや菊の影ほ  
うし 許六(江戸)  
應々さいへごたくや雪  
の門 去來(京都)  
うづくまる薬もこの寒  
さ哉 丈草(近江)  
長松が親の名でくる御慶  
かな 野坡(大阪)  
散る時の心やすさよ露粟  
の花 越人(尾張)  
田を賣りていさじれられ  
ぬ蛙かな 北枝(加賀)  
子や待たん餘り雲雀の高  
あがり 杉風(江戸)  
浮世草子 當代のこを寫  
したる草子の意。天和・  
貞享より寶曆・明和の頃  
までに出でし小説の總  
稱。著名なる作者は西  
鶴・八文字屋自笑・江島  
其磧等なり。



堂島 大阪市東區。

つた。大阪は商業の中心であつて諸大名の庫屋敷があり、堂島の米相場は全國の大勢を左右した。江戸は武士の威張つて居る處、大阪は町人の幅を利かす處であつた。それ故、町人を相手にする文學が大阪に起つたのは當然の勢であつた。

西鶴は芭蕉と違つて傳記が明かでないが、始は大阪に住んで俳諧の宗匠をして居た。そして談林の驍將として色々な俳書を著した。その後、師匠の宗因が死んだ天和二年、即ち彼が四十一歳の時に初めて小説に筆を染めたが、元來西鶴の才は特に世態人情を寫すと云ふやうな方面に適して居たので、その作品は全く目新しい趣向である上に、文章は多年俳諧で鍛へあげた腕の冴えた、簡潔な力の籠つたものであつたから、非常な喝采を博した。それで乘氣になつて、小説の方に熱中して居る中に、蕉風が次第に盛んになつて、談林

西鶴の俳書 五百韻・大矢數・後大矢數・兩吟千句・石車等。

文章は多年云々 折節は正月七日の夜、近所の男子を藤市方へ、「長者になるやうの指南を頼む」とて遣しける。座敷に燈籠かせ、娘をつけ置き、「露路の戸の鳴る時を知らせ」と申し置きしに、この娘し

の林に秋風が吹きそめたので、遂に本職の點者の方は疎かにして、小説家として身を終ふるに至つたのである。

元祿の頃は打續いた太平が齎した物質的文明に酔うて、十分に自己を反省する暇のない享樂時代であつた。教育もなく理想もなく富を得た町人は、何に依つて自分の慰藉を求めることが出來たであらうか。階級制度の悲しさには、幾ら金があつても町人は何處までも町人であつて、名譽や權力を以て世に誇ることは到底出來ない。そこで、あらゆる贅澤を極め、歡樂に耽つて、僭上をし、威張り次第に威張つて大盡様と奉られるのを快とした。西鶴はこのやうな無理想無教養の人間が狂ひ遊んだ有様を有りのまゝに描寫したのであるから、其の文字が卑猥に陥つたのも自然の勢である。西鶴は、一寸先は闇の世で、神も佛も當てにはならぬ、世の

ほらしくかじこまり、燈心を一筋にして、物まうの聲のする時、元のごまぐにして勝手に入りける。三人の客、座に著く時、臺所に摺鉢の音響き渡れば、耳を喜ばせ、これを推して、「皮鯨の吸物」といへば、「いや〜」と初めてなれば、雜煮なるべし」といふ。又一人はよく考へて、「煮麩」と落著きける。必ずいふ事にしてをかじ。藤市出てて三人に世渡りの大事を物語して聞かせける。一人申しけるは、「今日の七草さいふいはれはいかなる事ぞ」と尋ねける。「あれは神代の始末はじめ、雜炊さいふこと」を知らせ給ふ。又一人、「掛鯛を六月まで荒神の前に置きけるは」と尋ね、あれは朝夕に魚喰はずに、これを見て喰うた心せよさいふことなり。又一人、太箸をさる由來を問ひける。「あ

中は面白をかしく暮すが得である。云ふ現實主義の人であつた。これを近松と較べると、西鶴は想像を加へずに事實をよく直寫したが、道德的觀念が乏しい。然るに近松は想像を加へて事實を詩化し醇化して、それに道德的色彩を附加して居る。それ故、西鶴の物を讀むと、惡ずれのした通人の皮肉を聞くやうであるが、近松の方は溫和な世馴れた老人の教を聞くやうで、同情の暖かみが感じられる。

西鶴の鋭利な觀察や簡勁な文章は、眞に我が文學史中に獨歩すべきものである。元祿以前の近古小説は、まだ純粹の小説らしい體裁をなして居ないで、如何にも古臭い趣向を古臭い文章で型の如く極り文句の形容澤山に述べたに過ぎなかつたが、西鶴が出て、昔の型や極り文句を排斥して、當時の言葉を以て當時の社會を寫し、生氣潑刺たる新小説を

これは穢れし時白けて、一膳にて一年中あるやうに、これも神代の二柱を表はすなり。よく萬事に氣をつけ給へ。さて宵から今まで各、話し給へば、最早夜食の出づべき所なり。出さぬが長者になる心なり。最前の摺鉢の音は大福帳の上紙に引く糊を摺らした。さいはれし。井原西鶴「日本永代藏」

階級 士農工商。

近古小説 秋夜長物語・松帆浦物語・忍音物語・靜なごの中古文學の流さも見るべきものの外、御伽草子と稱するものあり。  
参考書には、平出鑑次郎「近古小説解題」  
島津久基 「近古小説新纂」



(筆宣師川菱) 俗風の祿元

作り出して當時の文壇を風靡した。これが西鶴の偉大な所である。

西鶴以前の小説が詰らなかつたと同様に、近松以前の淨瑠璃も殆ど見るに足らぬものであつた。淨瑠璃の名は室町時代末に出た「淨瑠璃姫物語」より生まれたのであるが、最初の間は扇拍子で盲法師などが語つたものである。それが慶長の頃になつて、三味線に合はせられたり、人形に仕掛けられたりして、次第に流行するやうになつて來た。その始は幸若の舞曲や御伽草子のやうなものに少しばかり修正を加へて語つたのであつたが、段々盛んになるに従つて、次第に新作も出るやうになつた。しかしそれとても孰れも室町時代の物語風の系統を引いたものであつて、荒唐無稽な英雄談や神佛の靈驗話に過ぎないで、現實の生活とは殆ど無關

淨瑠璃姫物語 淨瑠璃十二段草子ともいふ。御伽草子の一。小野お通の作と傳ふ。

幸若の舞 物語を音曲に合はせ扇拍子もて舞ふものにて、足利時代の中頃より徳川時代の寛文・延寶の頃まで行はれたり。

係な夢のやうなものが多かつたのである。其の作風を一變したのが近松である。

近松は西鶴と同じく經歷が能く分らない。又生國も色々異説があるが、兎に角二十歳前後の頃は京都に居たと云ふことだけは確實である。彼も若い時は都萬太夫座の拍子木を打つたり、道具を直したりしたものであると、當時の評判記類には見えて居る。或は一時下廻りの役者でもやつて居て近松姓を名乗つたのではなからうか。萬太夫座所屬の俳優に近松勘之介同京之助同梅之助などといふ名が見えるのも注目すべきであるといふ説がある。延寶五年彼が二十五歳の時、萬太夫座の爲に脚本に筆を染めて大喝采を得て以來、幾多の歌舞伎狂言を作るに同時に、井上播磨掾や宇治加賀掾等の爲にも淨瑠璃を作つて與へた。

都萬太夫 越後掾と稱す。  
淨瑠璃家。京都の人。

井上播磨掾・宇治加賀掾  
共に寛文頃の淨瑠璃家。

義太夫が未だ獨立しないで京都の加賀掾座にあつた頃から、兩雄は互に其の才を認めて默契する所があつたやうで、義太夫が大阪に下つて竹本座を創立するに方つて、近松は「出世景清」の新作を與へて出世の二字に前途の幸多からんことを祈つた。此の頃近松はまだ京都に住んで居たが、ついで大阪に下り、元祿十六年五月、世話物の初作「曾根崎心中」に大當りを得てからは、全く大阪に定住して、専ら義太夫の爲に思を凝らし筆を走らせて年々幾多の新曲を出し、遂に百餘篇の多きに及んだ。その世話物も時代物も義太夫の妙舌と相待つて、淨瑠璃をして浪花名物の隨一たらしめたのである。

西鶴の小説は最初から成功して居るが、近松は寧ろ西鶴よりも芭蕉の方にその進歩の順序が似て居る。芭蕉の俳諧

義太夫 竹本義太夫。義太夫節の祖。攝津の人。正徳四(一三七四)年歿す。年六十四。

百餘篇 その中の主なるものは、時代ものには藤壺の怨靈・花山院后評・赤染衛門榮華物語・藍染川・出世景清・釋迦如來誕生會・百日會我・雪女・五枚羽子板・傾城反魂香・碁盤太平記・國性爺合戦・日本振袖始・曾我會稽山・傾城酒吞童子、世話ものには曾根

が最初貞門や談林に彷徨うて居たやうに、近松も最初の間は古淨瑠璃の眞似をやつて居た。中には舞曲本や謠曲の丸取りのやうな所もあつて、兎角物語風に流れて戯曲の體裁を具へず、時間・空間の移り變りにも極めて無頓着なことをやつて居た。これ等の短所をすつかり除き得て、立派な戯曲の出来るやうになつたのは、芭蕉と同じやうに四十歳を過ぎてからである。だから名作と言はれるやうなものは五十歳以上のものに多い。

其の時代物は仕組が波瀾變化に富んで居て、見た目は賑やかであるが、荒唐無稽な夢のやうなことが多くて、今日の人には面白くない。しかし世話物になると、其の事柄も尋常で、人物も亦普通有りふれた男女で、能く此の時代相が寫し出されて居る。近松の世話物は孰れも事實に基づいたもの

崎心中・心中重井筒・丹波  
與作夕霧阿波の鳴渡冥  
途の飛脚・鐘の權三重帷  
子・心中天の網島・女殺油  
地獄・心中宵庚申等なり。

ではあるが、これを寫すに方つては、必ずしも其の事實に拘泥せず、自己の溫和健全な人世觀を以てこれを醇化して、敵も味方もそれ／＼に道理のあるやうな同情に富んだ筆を以て描いて、吾々をして如何にも人生の暖かみを覺えしめる。西鶴のさかしき隈々を探り求めたのと違つて、極端な寫實は藝術でない。云ふのが近松の見解である。近松の言葉で云へば、藝と云ふものは實と虚との皮膜の間にあるものである。實際を寫す中にも亦大まかな所があつて、始めて藝術になるのである。といふのである。要するに、近松は樂觀的の詩人であつて、たゞひ悲惨なことを書いても、其の調子には何となく華やかな所がある。西鶴の作には、歡樂の中にも、何處となく暗い影が伴つて居るが、近松の作は濕つぽい悲みの中にも、何處やらに光明が認められる。同じ材料を取

藝と云ふもの云々 藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるものなり。成程今の世實事によく寫すを好む故、家老は眞の家老の身振口上を寫すといへども、さらばさて眞の大名の家老などが立役の如く顔に紅脂白粉を塗る事ありや。又眞の家老は顔はかざらぬとて、眞役がむしろ／＼と髭を生えたり、頭は禿げなりに舞臺へ出て藝をせば慰みになるべきや。皮膜の間さいふがこゝなり。虚にして虚にあらず、實にし

扱つたものでも、西鶴の人物は、ひねくれて捨鉢になつて世間に反抗すること云ふやうな所があるが、近松の人物は、素直であつて浮世の義理には飽くまで服従して居る。西鶴の人物は往々世を咒ふやうな言語を放つが、近松のは一死を以て義理人情の衝突を調和して、未來の成佛を樂しむこと云ふ風である。

以上の三人は、其の人物性格に於てもそれごとく、違つて居り、又活動した方面も違つて居るが、孰れも元祿文學に新機運を導いて、從來の面目を一新した人々である。傳襲的の舊套を打破して古い型に依らず、前人の思想を其のまゝに借り來ることをもせず、自己の見聞感得に基づいて眞實を寫した點に於て相一致して居る。即ち芭蕉は天地四時の情景を寫し、西鶴は現實の社會の表裏を暴露し、近松は義理人情

て實にあらず、此の間に慰みがあつたものなり。  
(難波土産)

の曲折を描いたのである。此の傳襲的思想形式を排斥して新しい文學を起したと云ふことが、此の三人の偉大な所以である。(藤井乙男「江戸文學研究」による)

書は古今の事蹟を載するの器なり。讀書は餘力の爲す所なり。急務を措いて書を読み課を立つるは、學を以て讀書にありと爲すなり。學の日用と扞格するは、これたゞ書を讀んでその道を致めざればなり。書を讀むに、學の志を以てするは大益なり。讀書を以て學と爲すは、則ち玩物喪志の徒なり。書を讀むは聖人の書にあり。聖教は甚だ平易なり。常に讀みてこれを味はひ、玩んでこれを釋ね、推してこれを行へば、以てこれを證するに足る。他は皆利口に涉り、事を知るに便あるのみ。その一言半句一事一行の執り用ふべきあるも、その始終を推せば、乃ち全からず。たゞ廣才博識の一助たり、又これを釋つべからず。

(山鹿素行「聖教要錄」)

藤井乙男 國文學者。文學博士。兵庫縣の人。東京帝國大學文科出身。前京都帝國大學教授。

山鹿素行 儒者・兵學者。陸奥の人。寛文六年「聖教要錄」を著して幽せらる。貞享二(一三四五)年歿す。年六十四。

## 二 幻住庵記

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふるなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登ること三曲、二百歩にして八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像ごかや。唯一の家には甚だ忌むなることを、兩部光を和げ、利益の塵を同じうし給ふも亦たふとし。日頃は人の詣でざりければ、いこゞ神さび物靜かなる傍に、住捨てし草の戸あり。蓬根、笹、軒を圍み、屋根漏り壁落ちて、狐狸臥處を得たり。幻住庵と云ふ。

あるじの僧何某は勇士菅沼氏、曲翠子の伯父になむ侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。余また市中を去ること十年ばかりにして、五十年や

### 参考資料

風俗文選 十卷。本朝文選ともいふ。森川詩六の編。芭蕉以下、蕉門俳人二十七人の文章百十餘編を載せ、之を辭賦譜、説・解・記・紀・行・序・箴・銘・誄・歌・文・傳・碑・辯・表・論・頌・讀・書の二十一部門に分類せり。別に卷首に漢文の作者小傳を載せたり。参考書には、

馬場正統 「風俗文選通釋」  
葎甘介我 「風俗文選犬註解」

石山 滋賀縣滋賀郡石山村大字石山。  
岩間 同村大字内畑にある岩間山。  
國分山 同村大字國分。  
唯一の家云々 神佛二教の旨を合して一派を成せる

や近き身は、囊蟲の囊を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の

暑き日に面を焦し、高砂子歩み苦しき  
北海の荒磯に踵を破りて、今歲湖水の  
波に漂ひ、鳩の浮巢の流れこゞまるべ  
き蘆の一本の蔭頼もしく、軒端葺きあ  
らため垣根結ひそへなごして、卯月の  
初いこ苟且に入りし山のやがて出で  
じこさへ思ひそみぬ。  
遠に春の名殘も遠からず、躑躅咲殘  
り、山藤松に懸つて、時鳥屢過ぐるほご、  
宿かし鳥の便りさへあるを、啄木鳥の  
つゝくこも厭はじなごそゞろに興じ

と云ふれ情もさ  
新しき流もさ  
よふかき流もさ  
よつかり流もさ  
五腕の神もさ  
鹿もさ  
つれ、幻もさ  
やちわもさ  
先ぬけし  
推のし  
え福と仲秋日  
芝草の月書

ものを兩部神道といひ、純粹の神道を唯一派といふ。この八幡宮は神佛和光同塵なるをいへり。僧何某 膳所藩士。俗稱を本多八左衛門といふ。菅沼曲翠子 芭蕉の門人。膳所藩士。奸臣を斬つて自殺す。

やがて云々 吉野山やがて出でじこ思ふ身を花散りなばさ人や待つらむ(西行法師)

吳楚云々 杜甫の「登岳陽樓」の詩に「昔聞洞庭水、

ばだち、人家よきほごに隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高嶺より、唐崎の松は霞籠めて、城あり、橋あり、釣垂る、舟あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗取る歌、螢飛びかふ夕闇の空に水雞の叩く音、美景物として足らずといふことなし。中にも三上山は士峯の傍に通ひて、武藏野の古き栖處も思ひ出でられ、田上山に古人を數ふさ、ふが嶽千丈が峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいと黒う茂りて、網代守ることと詠みけむ歌の姿なりけり。

なほ眺望隈なからむと後の峯に這上り、松の棚作り藁の圓座を敷きて猿の腰掛と名づく。かの海棠に巢を營み、主薄峯に庵を結べる王翁、徐佗が徒にはあらず。たゞ睡癖山民となつて、屏顔に足を投げいだし、空山に虱を捫つて坐す。偶、心まめなる時は谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とくくくの雫を

今上岳陽樓、吳楚東南拆、  
乾坤日夜浮、親朋無一字、  
老病有孤舟、戎馬關山北、  
憑軒潯酒流。」  
日枝の山 比叡山。  
唐崎 滋賀縣滋賀郡滋賀村。  
笠取 京都府宇治郡宇治村の東に聳ゆる山。  
三上山 滋賀縣野洲郡。  
士峯 富士山。  
田上山・さ、ふが嶽 共に栗太郡。田上山には猿丸太夫の墓あり。  
袴腰 滋賀縣滋賀郡。  
黒津の里 同栗太郡。  
網代守る云々 古歌に、「田上や黒津の庄の寝子男網代守るさて色の黒さよ」  
海棠云々 黃庭堅の「山谷集」に、「徐老海棠巢上、王翁主薄峯庵。」  
虱を捫つて云々 王荊公の詩に、「捫虱對青山、袂書眼北園。」

佗びて、一爐の備いと輕し。はた昔住みけむ人の殊に心高く住みなし侍りて、巧み置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて夜の物納むべき處など、聊かしつらへり。ざるを筑紫高良山の僧正は賀茂の甲斐何某が嚴子にて、このたび洛に上りいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いと易々と筆を染めて幻住庵の三字を送らる。やがて草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ、旅寝といひ、ざる器貯ふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅簑ばかり枕の上の柱に懸けたり。

晝は稀々さぶらふ人々に心を動かかし、あるは宮守の翁、里のをのこども來りて、猪の稻くひ荒し、兎の豆畑に通ふなど、わが聞きしらの農談。日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈を取りては罔兩に是非をこらす。かく言へばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡を隠さ

とくくくの云々 西行法師の歌と傳ふるものに、「とくくくくのおつる岩間の昔清水汲みほすひまもなき住居かな」  
高良山 福岡縣三井郡。山頂に高良神社あり。  
賀茂の甲斐何某 賀茂神社の祠官藤木甲斐守敦直。能書家。慶安二(一三三〇)年歿す。年六十八。



むこにはあらずや、病身人に倦みて、世を厭ひし人に似たり。倩ら年月の移りこし拙き身の科を思ふに、一たびは仕官懸命の地を羨み、或時は佛籬祖室の扉に入らむとせしも、便りなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯の計とさへなれば、終に無能無才にしてこの一筋につながる。樂天は五臟の神を破り、老杜は瘦せたり。賢愚文質の等しからざるも、いづれか幻の栖處ならずやと思ひ捨てて臥しぬ。

先づたのむ椎の木もあり夏木立 (森川許六「風俗文選」)

行水のすてどころなし蟲の聲 鬼 貫  
歛さげて叱りに出るや桃の花 涼 苑  
長閑さに無沙汰の神社まはりけり 太 祇  
さしぬきを足で脱ぐ夜や朧月 無 村  
五月雨や或夜ひそかに松の月 麥 太  
寝がへりをするぞ脇よれきりぐす 一 茶

佛籬祖室の云々 嘗て江戸の深川に住みし頃、佛頂禪師に參禪せしことをいふ。

樂天云々 元稹の寄樂天詩に「志逢佳景惟惆悵、兩地各傷無限神。」

老杜云々 李白の贈杜東詩に「飯顆山頭逢杜甫、頭戴笠子日卓牛、爲問緣何太瘦生、只爲從前作詩苦。」

森川許六 名は百仲、五老井と號す。近江彦根の藩士。芭蕉の高弟。正徳五(二二三七五)年歿す。年五十九。

### 三 馬方三吉

お傍の衆に囃されて、幼心の姫君、かう面白い束とは、今までおれは知らなんだ。さあ〜往かう、はや往かう。やあ御座らうとおつしやるか。そりやめでたいは、めでたいは、又もや御意の變らぬ間に、行列揃へ。と立騒ぐ。お乳の人は勇みをなし、左様なら、ま一度大殿様お袋様とお盆。これも馬子殿のお蔭ぢや、出来いた出来いた。其方には禮いふ、褒美やる。其處に待ちやや。とささめき渡り、奥に御供し入りにけり。

馬方は遂に見ぬ金の間を、うる〜と覗き廻れど、筵のほか踏みも習はぬ備後表、三吉え、此の座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも此方の内がけつこで御座る。と、獨言して居たりけり。お乳の人は大高にお菓子さま〜盛

#### 参考資料

丹波與作 一卷。近松門左衛門の作りし淨瑠璃本。丹波國の一城主由留木殿の女、しらべの姫が江戸の高家入間殿へ養女として入込むこと、そのお乳人滋の井の一家のことなどを綴りしものなり。

姫君 しらべの姫。時に十歳。江戸への旅立ちに際して、俄にこれを見なみて、一同を困却せしむ。時に十歳ばかりの馬方三吉は東海道中雙六を演じて姫の御機嫌をなほして再び旅立つこととなりぬ。

大高 腰高に同じ。菓子を盛る器。

入れて、これく、三吉其處にかまあく、其方はけな者ぢや。道中雙六お目にかけて、それ故に姫君様お江戸へ御座らうと御意なさるゝ。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子有りがたう戴きや。お錢三筋買ひたい物買ひやや。殊に其方は通しぢやげな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋の井に逢はうこいや。見れば見るほごよい子ぢやに、馬方させる親の身は、よくく、であらう。こいと懇ろの詞の末、三吉つくく聞きすまし、由留木殿の御内、お乳の人の滋の井様とはお前か。それなら己が母様と抱付けば、滋の井あゝこは慮外な。おのれが母様とは馬方の子は持たぬ。こもぎ放せばむしやぶりつき、引きのくれば縋りつき、三吉なんの無いこご申しませう。わしが親はお前の昔の偶配、此の御家中にて番頭伊達の與作、其の子は私、此方様の腹から出た與之助はわしぢやはい

けな者 けなげな者の略。

錢三筋 三百文。  
通し 江戸まで通し雇ひの意。

の。父様は殿様のお氣に違うて、國をお出なされたは三つの時でおろ覚え、沓掛の姥が咄には、母様も離別とやらで殿様に御奉公。こなたを姥が養育し、父様に逢はせたい思へごも甲斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋の井様と尋ねよ。と懇ろに教へて、姥はおれが五つの年、久しう痰を煩うて、揚句に鳥羽の祭に往て、餅が喉に詰つて、つひ死んでのけました。在所の衆が養うて、漸う馬を追ひ習ひ、今は近江の石部の馬借に奉公します。これ守袋を見さしやんせ。何の嘘を申しませう。お前の子に紛れはない。外に望は何もない。父様を尋ね出し、一日たりとも三人一處に居て下され。見事、沓も打ちます。此の草鞋もわしが作った。晝は馬を追うて、夜は沓打ち草鞋作り、父様、母様養ひませう。父様ご十つに居て下され。拜みまする母様と、取付き抱付き泣

沓掛 京都府乙訓郡大枝村沓掛。

馬借 馬を借して業をなすもの。

き居たり。

あつあつお乳ははつこ氣も亂れ、  
見れば見るほど我が子の  
與之助守袋も覚えあり。飛  
付いて懷に抱入れたく氣  
はせけごも、あつあ大事の  
御奉公、養ひ君のお名の疵  
詐つて叱らうか。いや可愛  
げにさうも成るまい。まあ  
ちよつと抱きたい。あゝご  
うせうと、百千色の憂き涙、  
雙つの眼には保ちかね、咽  
び沈んで居たりしが、いや／＼

本 璃 瑠 淨

我が子ながらもさかしいも

あつあ 發語。

の詐つて誠とせず、母を心の穢いものと蔑まるゝも情なし。  
譯を語つて合點させ、恥ぢしめて返さんものと、涙拭うて氣  
を静め、こゝへ來い、與之助。こゝ引寄せて兩手を取り、さても大  
きうなりやつたの。こゝても成人せうならば、侍らしうなぜ尋  
常にも育たぬぞ。顔の道具、手足まで、母は斯うは産付けぬ。美  
しい黒髪を、このやうに剃下げて、手足は山のこけ猿ぢや。ほ  
んに氏より育ちぞ。こゝ又さめ／＼こ泣きけるが、これ、物を合  
點しや。腹から産んだは産んだれども、今では子でも母でも  
ない。淺ましく成りさがつたを嫌うて云ふでは更々ない。こ  
この譯をよう聞きや。母はもと御前様の奉公人、與作殿は  
奥小姓、殿様の御慈悲にて夫婦になされ、與作殿は段々に奏  
者役番頭、千三百石までお取立て、追腹ほどの御恩の家。其の  
間にそなたを設け、上には姫様御誕生、御内證のよしみにて、

こゝても云々 同じく成人す  
るならば。

御前様 由留木殿の奥方。

追腹ほどの御恩 主人に殉  
死せればならぬほどの御  
恩。

御内證 しらへ姫の實母。

母が乳を上げまし、首尾さへよければ、そなたも今家老衆の子同然に、二番ご下座にはさがらぬ人なさけなや、父様が江戸詰に、大事のころを仕損ひ、また切腹に極つたなれども腹を切らせては、女房お家に置かれぬ時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も出ればいかゞとて、母を其のまゝ、残さうため、父様の命助り、奉公構ひの御改易、其の時母も一緒に退けば、尤も夫婦の道は立つ。お姫様の乳離れ、お苦みをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれと父様のこころわり故、第一は夫のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼うても御勤氣の末、氣遣ひな。與作が子さばし云やんなや。さあ早う御門へ出や。あゝ、いかなる因果な生まれ性、現在我が子に馬追させ、夫の行方も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つ

奉公構ひの御改易 當家の士の中より名籍を除くこと。構ひとは差支の意。

ばし 接尾語。

て、お乳の人よお局よと、玉の輿に乗つたこと、これが何になること。と、聲を忍びに泣くばかり。子は生まれつき賢くて聞分け有るほど猶泣入り、三言悲しい咄を聞きました。さりながら常に姥が申したは、姫君様と私とは乳兄弟のことなれば、母様にさへ逢うたらば、父様も出世なさるゝ由、御訴訟なされ下されかし。と、いへばちやつと口を押へ、滋の井、あゝ、勿體ない、其の乳兄弟いはぬこと。姫君様は關東へ養子嫁御にお下り。高いも低いも姫御前は大事のもの。先は他人の世間體、三吉といふ馬追が乳兄弟に有るなごこと、ごう妨げにならうやら。蟻の穴から堤も崩れる。軽いやうで重いこと。ひそく云うて人も聞く。先づ早う出てくれ。と泣く。云へば、三言「あゝ、母様あんまり遠慮過ぎました。先づ云うて見て下され。」  
滋の井、まだ云ひ居るか、聞分けない。夫のこと、我が子のこと、母

蟻の穴云々 韓非子に「千丈之隄以蟻蟻之穴潰。」

に如才が有るものか。合點のわるい聞分けない。と制する内に、奥よりも、お乳の人はどこにぞ。御前から召します。と呼ばはれば、滋の井、あれ聞きや、人が来る。出てたも。と手を取つて引出す。

不便や三吉しくく、涙、頬冠して目を隠し、沓見まつべて腰に附け、見すばらしげな後影。滋の井、こりや、ま一度こちら向きや。山川で怪我しやんな。雨風雪降、夜道には、腹が痛い。と作病起し、二日も三日も休んで、煩はぬやうにしてたも。毒な物喰はずに、腹や麻疹の用心しや。可愛のなりや、いたくしや。千三百石の代取が何の罰ぞ、咎ぞ。と、式代の段箱に身を投伏せて歎きしが、懐中の有合一步十三、服紗に包み、これたしなみに持つて居や。と、涙ながらに渡さるる。三吉見返り恨めしげに、母でも子でもないならば、病まうと死なうといらぬお

沓見まつべて 沓を調べま  
さめて。

式代 玄關の板敷。

かまひ。其の一步もいらぬ。馬方こそすれ、伊達の與作が惣領ぢや。母様でもない他人に金貫はう筈がない。え、胴慾な母様、覚えて居さつしやれ。と、わつと泣出す其の有様。母は魂消え入りて、養ひ君、お家の御恩思はずば、さて一人子を手放して、何の遣らうぞ。奉公の身の淺ましや。と、悶え焦れて歎きける。

時に奥口さゞめいて、早御立ち。と、姫君のお興昇きあげ行列立て、お乳の人の乗物をひら付けにこそ昇きよせけれ。お乳はさあらぬ顔付して、姫君の御伽に最前の馬方を此の乗物に引付け、お慰みに謠はしや。と、畏つた。と、宰領ごも、こりや、其處なじねんじよめ、謠ひ居らう。と、ぎごつなく、やあ此奴はほえをるか。何ぢやこりやいまくし。と、握り拳を二つ三つ、頂きながら泣聲に、三吉、坂はてるく、鈴鹿は曇る、土山あひの、

じれんじよ 三吉の渾名。  
ぎごつなく 愛想なく。

あひの土山雨がふる。ふる雨よりも親子の涙、中にしぐる、雨宿り。(近松門左衛門「丹波興作」)

人の憂苦を慮りて、人の妨げとなる事を施すべからず。常に心に憐みありて、人を救ひ恵み、假りにも人を妨げ苦しむべからず。我獨り樂しみて人を苦しむるは、天の惡む所、畏るべし。人と共に樂しむは、天の喜ぶ理にして、誠の樂みなり。この故に、天の道に従ひ、人の道を行ひて、自ら樂しみ人を樂しましめん事は、常に善を行ひ惡を去るを以て、わざとすべし。かくの如くにせん事は、別の務なし。唯聖の道を學んで、其の理を知るべし。人を恨み怒り、自ら誇り、人を譏り、人の小なる過を責め、人の詞を咎め、無禮を怒るは、其の器小なり。これ皆樂みを失ふわざなり。怒と慾とを怵へ、心を廣くして人を責め咎めざるは、器大なるなり。これ和氣を保ちて樂みを失はざる道なり。

(貝原益軒「樂訓」)

貝原益軒 儒者・醫師。名は篤信。筑前の人。正徳四(一七二四)年歿す。年八十五。

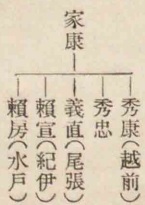
### 四 水戸の學風

水戸は徳川幕府御三家の一として封邑三十五萬石、これを尾の六十餘萬石、紀の五十五萬石に比すれば、其の領する所最も少く、水陸の富、また尾・紀兩藩に及ばざりし。雖も、而も其の地江戸に近く、世々將軍輔翼の重責に任じ、東陲に蟠居して奥羽を制したれば、聲望並ぶものなく、威權四疆を壓せり。

光圀その藩主たるや、英明にして學を好み、夙に綱常を正し、名分を明かにして世道に益する所あらんことを欲し、明儒朱舜水を聘して聖教の學を講じ、これに資りて本邦固有の道義を扶植したるのみならず、又大日本史の編纂を企てて、皇統の正閏を匡し、人臣の是非を論じ、以て勸懲の範を衆に示

#### 參考資料

大日本史 三百九十七卷。別に目錄五卷。水戸藩の編。神武天皇より後小松天皇に至る漢文體の歴史にて、本紀・列傳志表の四部より成る。



光圀 賴房の第三子。寛永五年六月十日生まる。小名千代松。日新齋・常山人。率然子・梅里はその號なり。寛文元年七月父の卒後封を襲ぐ。同三年明朝の遣臣朱舜水を聘して賓師となす。元祿三年十月封を兄の子綱條に譲る。時に年六十三。同四

せり。こゝに於て天下の遺賢翕然として水戸に集り、水戸は一時學問の淵叢となりて、所謂後の水戸學を胚胎せしめたり。而も歴代の藩主を始め、闔藩よくこれを承述して、渝らざりしかば、久しきに亙りて其の感化愈深く、遂に齊昭の子慶喜の入つて將軍職を繼ぐや、時勢を明察し、其の父祖の遺風を體して大政返上の英斷に出で、以て明治維新の鴻業を翼賛し奉れり。其の事功の赫々たる、豈偉ならずや。

抑、徳川時代初期の編纂に係る國史の雙壁は、本朝通鑑と大日本史となり。本朝通鑑は幕府が爲政の龜鑑たらしめんとして、林家に命じて、前後十數年を費して大成せしめたるものにて、實に二百七十三卷の浩瀚たり。而して大日本史は我が國體を闡明せんことを主眼とし、其の規畫の廣大なる、其の年月の久しきに亙れる、其の編纂に従へる學者の多き、

三八  
年西山に隱居す。同五年八月楠公の墓碑を澗川に建つ。同十年十二月六日西山に卒す。年七十三。  
齊昭・慶喜 四〇頁系圖參照。

本朝通鑑 二百七十三卷。  
正編四十卷は林道春、續編二百三十卷及び前編三卷は林恕の撰なり。神武天皇より後陽成天皇に至る漢文體の歴史。

或は其の出費の莫大なる、未だ東西古今に其の儔を見ざる所なり。惟ふに足利時代以後、織豊時代を経て徳川氏の世となり、幕府の基礎漸く不易ならんとする時に當つて、尊王の大義を明徴せんとする、豈容易の業ならんや。光圀の如き、地位・聲望二つながら兼ね備ふるものにして、始めてこれを能くし得べきなり。

正保二年、光圀十八歳にして適、史記の伯夷傳を読み、大いにその高義を慕ひ、卷を撫して歎じて曰く、載籍あらずんば虞夏の文得て見るべからず。史筆に由らずんば何を以てか後人をして觀感する所あらしめん。こゝに於て蹶焉として始めて修史の志ありたりといふ。

その始めて江戸駒込の別邸に史局を設けて史料の蒐集に著手せしは、明暦三年二月二十七日にして、時に公は歳三

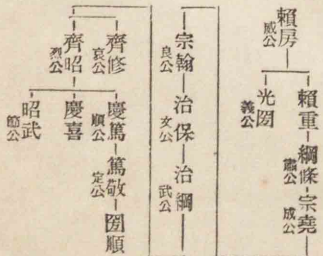
駒込 東京市本郷區。

明暦三年 後西天皇の御宇。(二二一七年)

十なり。その後封を襲ぐや、益、修史事業の擴張に力め、寛文十二年春に至りて史局を小石川の新邸に移し、自ら館名を撰して彰考と號し、且史館警を作りて史臣の操行を戒飭したり。而して日夜寢食を忘れて研鑽到らざるなく、或は奏請して祕府の書を借覽し、或は幕府に請ひて諸侯の祕庫を探り、或は縉紳に依頼してその藏書を閱覽し、或は史臣に命じて天下の社寺を巡訪せしむる等、具さに辛苦を重ねたり。

かくて年を閱するこゝ四十三、その間或は藩主の繁を偷み、或は隱居の閑を利して、孜々として倦まざりしも、大日本史の竣功はなほ容易ならず。蓋しその成績の遅々たる、誠に公の豫想の外に出でたり。公は遂に己が生前に於てその完成を見る能はざるを思ひ、晩年、綱條及びその史臣等を召して大成を他日に期するに至れり。而して綱條の世に本記列

寛文十二年 靈元天皇の御宇。(二三三二年)  
小石川の新邸 東京市小石川區小石川町。



傳の編成漸く成り、享保五年十月二十九日、宗堯に至つて本紀七十三卷、列傳百七十卷、序目、修史例、引用書目等總べて二百五十卷は幕府に獻せられたり。而も功程未だ半ばならず、爾來綿々として星霜を経るこゝ百九十餘年、その間に於て修史の事も亦自ら消長を免れず、一時殆ど中絶に歸せんことしたるを、治保の代に及び、藤田幽谷等の主唱に依りて、更にその編修を繼續し、豊田天功最もこれに勤め、栗田寛その後を襲ひて、只管その竣功を急ぎしかば、この稀世の大事業も明治三十九年に至りて漸く完成を告げたり。前後を通じて實に二百五十年を閲せり。かくて萬世不朽の龜鑑たる大日本史は成れり。眞にこれ經國の文章不磨の大典たり。

大日本史の成れる、これに生涯を捧げたる幾百の學者中、安積澹泊、中村篁溪、栗山潜峰、三宅觀瀾、栗田寛等を以てその

享保五年 中御門天皇の御宇。(二三八〇年)

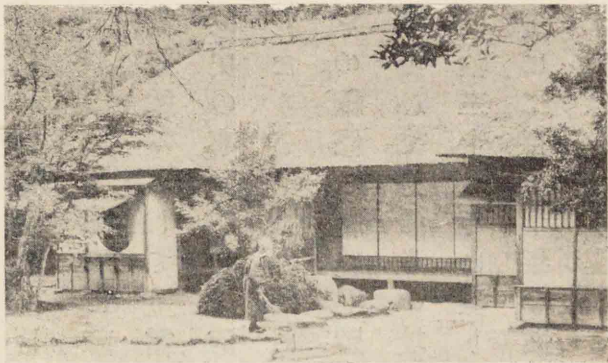
藤田幽谷 儒者。名は一正。立原東里の門人。文政九(二四八六)年歿す。年五十三。  
豊田天功 儒者。名は亮。彰考館總裁。元治元(二五二四)年歿す。年六十。  
栗田寛 國學者。文學博士。晩年文科大學教授となる。明治三十二年歿す。年六十五。

安積澹泊 儒者。名は覺。元文二(二三九七)年歿す。年八十二。



殊勳者こそせざるべからず。これ等の碩學鴻儒が心血を傾注して切磋琢磨したる偉功の赫灼たるは、百世に亘りて眞に不滅なるべし。

大日本史中、神功皇后を皇妃傳に收め、弘文天皇を本紀に載せ、吉野朝を正統としたるが如き、そのよく大義名分を明かにしたる光圀の識見の高邁なるに、何人か驚嘆せざらんや。今日に於てこそ、兒童走卒もなほ大義名分を解し、國體の尊嚴を知る。雖も、今を距る約そ三百年の當時に於て、斷乎として尊王の大義を中外に宣揚するに吝ならざりしもの、素より諸儒の翼賛と熱



中村篁溪 儒者。名は順言。正徳元(二二七一)年歿す。年六十六。  
栗山潜峯 儒者。名は愨。山城の人。寶永三(二二三六)年歿す。年三十六。  
三宅觀瀾 儒者。名は緝明。山城の人。享保三(二二三七八)年歿す。年四十五。

誠に俟ちしもの多かるべし。こはいへ、これ誠に公が天資の聰明と好學とに歸因するものといはざるべからず。

元和偃武後、家康の獎學に意を用ふるや、文教蔚然として起り、四方の學徒競うて江戸に蟠集し、各その學ぶ所を以て幕府に祿仕せんことを冀へり。然るに幕府の威權漸く固く、江戸の勢日に京師を壓し、諸法度を定めて皇室を拘し奉り、遂に綸旨に逆らひて、後水尾天皇の、

あし原よ茂らば茂れおのがまゝ、こても道ある世こは思はず

の御製を拜し奉るに至りては、志ある者の如何で憤懣に堪へんや。こゝに於て、これに快からざる京師の儒者間に、遽然として尊王斥霸の暗流を生ぜり。劔欄に赤心報國の四字を篆したる淺見綱齋、獄中に狼彙録を著したる三宅尙齋、仁齋

淺見綱齋 京都の儒者。名は安正。元徳元(二二三七)年歿す。年六十。

門下の偉才並河天民の輩の如きは、皆幕府に祿仕するを屑しこせずして、遙かに光圀の高風を慕ふに至れり。かくて關西の英髦は期せずして彰考館に集れり。蓋し光圀の言行、公明にして大義を重んじ、よく倫常を正して四民を率ゐしかば、その徳化を慕ふもの自ら風をなせるものといふべし。

これ等の水藩に集れる學徒の志せる所は、實に尊王にあり、敬神崇儒にあり。その熱烈の精神に磨礪せられたる學風は、光圀の高唱せる明倫正名の大旆の下に統率せられて、遂に水戸學を大成するに至れり。後世齊昭に及んで、大いに藩學の振興を圖るや、水府に弘道館を設けて、親らその記を撰して曰く、

嗚呼、我國中士民夙夜匪懈、出入斯館、奉神州之道、資西土之教、忠孝无二、文武不岐、學問事業、不殊其效、敬神崇儒、無有偏

狼寔錄 三卷。理義を論ぜるもの。寶永四年以來三年間獄中において、釘を以て指を刺し、血を以て記せり。  
三宅尚齋 儒者。名は重固。播磨の人。山崎闇齋の門人。  
仁齋 京都の儒者。名は維禎。古學派を開く。寶永二(一三六五)年歿す。年七十九。  
並河天民 京都の儒者。名は亮。享保三(一三七八)年歿す。

黨集衆思、宣羣力、以報國家無窮之恩、則豈徒祖宗之志弗

墜、神皇在天之靈、亦將降鑒焉。

誠によく曩祖光圀の精神を體し、水戸學の眞諦を表明せるものといふべし。その臣藤田東湖、鬼才あり。これが述義を著して一藩を率ゐ、我が國外交の危機に面し、鎖國開港の論囂々たるに當つて、斷然尊攘の議を決して一世を風動するや、慷慨の士、雲合霧集して水藩は尊攘論の中心となり、毅然として天下の重きをなしたり。その勢の及ぶ所、或は安政の大獄となり、或は幕府の違勅問題となり、遂に攘夷は討幕と化し、天下の大勢は滔々として革新の氣運に向かひ、以て明治維新の大業を達成せしめたり。

明治三十三年十一月、明治大帝の水戸地方に於ける陸軍大演習に親臨し給ふや、特に勅使を光圀の墳墓に差遣せら

藤田東湖 幽谷の子。名は彪。史官及び側用人となりて、よく齊昭を輔佐せり。安政二(一五一五)年歿す。年五十。

れて、正一位を追贈せさせ給ひ、

贈従一位徳川光圀夙ニ皇道ノ隱晦ヲ慨ヒ深ク武門ノ驕  
盈ヲ恐レ名分ヲ明ニシテ志ヲ筆削ニ託シ正邪ヲ辨ジテ  
意ヲ勸懲ニ致セリ洵ニ是レ勤王ノ唱道ニシテ實ニ復古  
ノ指南タリ朕適當陸ニ幸シ追念轉切ナリ更ニ正一位ヲ  
贈リ以テ朕ガ意ヲ昭ニス

この優詔を賜はり、今又聖上陛下には、昭和四年十一月、水戸  
行幸に際し、當主圀順侯を行在所に召され、水戸家歴代の勳  
功を思召し給ひて、特に公爵を授け給へり。これ全く光圀の  
忠誠能く大義を明かにして遺芳を後昆に垂れたる餘榮こ  
いはざるべからず。

それ我が國に於て學説の最も偉大なる影響を社會に及  
したるものを數ふれば、先づ指を水戸學に屈すべし。而して

水戸學の精神は正に大日本史に結集せられたりといふべ  
し。嗚呼一管の筆、能く建國の大本を昭かにして天下の歸趨  
を定め、以て國民の精神を振作更張せしめたり。眞に偉とせ  
ざるべからず。而もこの偉業を企畫せられたる光圀の功績  
に至つては、炳として日月と光を爭ふものといふべく、誰か  
其の高風遺徳を仰がざらんや。

述 懷

藤田東湖

三決死矣而不死、二十五回渡刀水、五乞間地不得間、  
三十九年七處徙、邦家隆替非偶然、人生得失豈徒爾、  
自驚塵垢盈皮膚、猶餘忠義填骨髓、嫫姚定遠不可期、  
丘明馬遷空自企、苟明大義正人心、皇道奚患不興起、  
斯心奮發誓神明、古人有云斃而已。

五百蟲譜

蝶の花に飛びかひたる、やさしき物の限なるべし。それも啼く音を愛づるものならねば、籠に苦しむ身ならぬこそ猶めでたけれ。さてこそ莊周が夢もこの物には託しけめ。

蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそさいはひなれ。朧月夜の風静まりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで翁の目覺したれば、このものこのこ、更にも謗りがたし。

蟬はたゞ五月晴に聞きそめたるほごがよきなり。や、日ざかりに鳴きさかる頃は、人の汗しぼる心地す。されば初蝶も初蛙もいふことを聞かず、この者ばかり初蟬といはる、こそ大いなる手柄なれ。やがて死ぬけしきは見えず。こ

参考資料

鶉衣 十四卷。横井也有の俳文集。参考書には、佐々政一「鶉衣評釋」武笠三「鶉衣」石田元季「校定註釋鶉衣」

莊周が夢も云々 莊子齊物篇に「昔者莊周夢爲胡蝶栩栩然胡蝶也。自喻適志與、不知周也。俄然覺、則蘧々然周也。不知周之夢爲胡蝶與、胡蝶之夢爲周與」とあり。古池に云々 古池や蛙さびこむ水の音 (芭蕉)

やがて死ぬ云々 やがて死ぬけしきは見えず蟬の聲 (芭蕉)

このものの上は、翁の一句に盡きたりといふべし。

螢は比ふべきものもなく、景物の最上なるべし。水に飛びかひ草にすだく。五月の闇は只このものの爲にやこまでぞ覺ゆる。しかるに貧の學者にこられて、油火の代りにせられたるは、このものの本意にはあらざるべし。歌に螢火こよませざるは、この外の不自由なり。俳諧にはこの眞似すべからず。

茅蝸は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならむ。つくづく、ぼふしといふ蟬は、つくし戀ひしともいふなり。筑紫の人の旅に死して、このものになりたりと、世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。蜘蛛は巧に網を結んで、潛まつて物を害せむとす。もろこ

貧の學者云々 晉の車胤の故事。晉書車胤傳に「胤字武子、幼恭勤博覽、貧、不常得油、夏月以練囊盛數十螢火、照書讀之」

しの昔には退隱の媒ともなりたれど、ひとへに奸賊の心ありていと憎し。古代、朝敵の初として頼光をさへおびやかしたる、いと恐ろし。さはいへ廢宅の荒れたる軒の蟬の羽なごかけ捨てたるは、聊かあはれ添ふる折もあらむか。彼はかひがひしく巢作りてこそあれ、東海道にちりぼひたる宿なし者をば、くもこはいかでいふやらむ。

蠶の生涯は世の爲に終り、火取蟲は誰が爲に身を焦すや。蜉蝣ははかなきためしにひかれ、蓼くふ蟲は不物ずきの謗となれり。同じ寶の名によばれて、玉蟲はやさしく、黃金蟲はいやし。

蟻は明暮に忙しく、世の營に隙なき人には似たり。東西に聚散し、餌を求めてやまず。いつか槐安の都をのがれて、その身の安き事を得む。さるもたより悪しきかたに穴を營みて、

退隱の媒 金樓子に楚國鬻舍、初隨楚王、朝宿未央宮、見蜘蛛大如粟、四面築羅網、有蟲觸之而死。舍乃歎曰、吾生亦如此耳、仕宦者人之羅網也。豈可淹歲於是、挂冠而退、時人謂之爲蜘蛛之隱。

槐安の都 書言故事に「異聞集曰、淳于芬醉夢入大槐安國、見王、王曰、南柯郡屬卿爲太守、居凡二十載、使者送出、遂寤、尋古槐下蟻穴、洞然明、乃槐安國、又一穴直上南枝、即南柯郡也。」

千丈の堤を崩すべからず。

蠅は歐陽氏に憎まれ、紙魚は長嘯子にあはれまる。狗の齒に噛まる、蚤はたま〜にして、猿の手にさぐらる、虱は逃る、ここ難かるべし。

蝸牛は只水にあるべきものの、いかで草葉に遊ぶらむ。家持ちたれども、行く先々を負ひ歩くは、水雲の安きにも似ず。蛇、蚯蚓の足なくとも歩むべくば、蜈蚣をさむしの數多きは不用の事なり。

蟪蛄の瘦せたるも、斧を持ちたる誇より、その心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

蟹の歩に譬ふべきものこそなけれ。たゞ原吉原を駕に乗りて富士を眺めゆく人には似たり。促織、鈴蟲、轡蟲はその音の似たるを以て名によばる。松蟲

歐陽氏 名は修。支那の宋代の文人。「憎蒼蠅」あり。古文真寶後集に收む。  
長嘯子 木下勝俊。若狭小濱の城主。後封を失ひ、隱棲して和歌をよくす。  
慶安三(二二一〇)年歿す。年八十一。「憐紙魚」詞あり。扶桑拾葉集に收む。

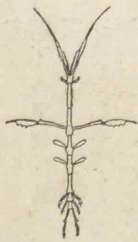
原 静岡縣駿東郡原。  
吉原 同縣富士郡吉原。

その木にもよらで、いかでかく名を附けたるならむ。毛生ひむくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一つ在處に二人の八兵衛ありて、一人は後生をねがひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

きりくすのつゞり刺せこは、人のために夜寒を教へ、藻に棲む蟲は、われからどたゞ身の上をなげくらむを、簀蟲のちよこ呼ぶは、母をば慕はで、なご父をのみ戀ふらむこあやし。

蚊は憎むべきかぎりながら、さすが卯月の頃、端居めづらしき夕べ、始めてほのかに聞きたる。又は長月の頃、力なく残りたるは、寂しきかたもあり。蚊囁つりたる家のさま、蚊やり焚く里のけぶりなど、かつは風雅の道具ともなれり。藪蚊は殊にはげしきを、かの七賢の夜咄には、いかに團扇の隙なか

つゞり刺せ 秋風に縫ひぬらと藤袴つゞりさせてふきりくすなく(在原棟梁) われから あまの刈る藻にすむ蟲のわれからさ音をこそなかくせをば怨みじ(藤原直子)



七賢 晉の嵇康・阮籍・山濤・向秀・劉伶・阮咸・王戎等は竹林の遊をなせり。

りけむ。(横井也有「鶉衣」)

偃鼠河に飲めども腹に満つるに過ぎず。汝何ぞわが肉池を飲乾して、わが印石をして顔色なからしむる。猫に食はせむか、陥しにかけむか。地獄陥しか、極樂陥しか。罪の輕重を樹陥しに計らば、漢の張湯が例なきにしもあらねど、もし白鼠と内縁あらば、大黒殿の思召もいかゞと思ひて、石見銀山一等を赦し、鼠衣を剥ぎ、鼠算の過料を取り、壁の穴々、桁の隅々、残らず追放するものなり。この趣を西寺の老鼠より、若草の鼯鼠に至るまで、よくく申し聞かすべきものなり。

むらさきの外にくきは肉いれの朱をうばへるねづ  
みいろかな (四方赤良「四方のあか」)

古人「春宵一刻價千金」とめつたに高ばれば、又浮世を三分五厘と捨賣にする男もあり。然れども、春宵一刻に千金出して買うた戯者もなく、三分五厘に賣りて了ふ出来合の浮世もなし。いかに口から地代の出ぬものなればとて、出るまゝのいひたこと、詰る所はよくもあしくもいひなし。次第の浮世にて、浮世の定めなきは人の心の定めなきなり。(風來山人「六々部集」)

横井也有 俳人。名は時般。尾張藩の重臣。天明三(一八一四)年歿す。年八十二。

四方赤良 幕府の士。本名太田翠、四方赤良。四方山人。蜀山人その他の號あり。狂歌・狂文に長す。文政六(一八二四)年歿す。年七十五。

風來山人 博物學者。戲作者。平賀鳩溪の戲號。別に天竺浪人・森羅萬象・福内鬼外等の號あり。戲岐の人。安永八(一七九九)年歿す。年六十七。

### 六 柳生宗矩

寛永十四年、筑紫にて逆徒起りし時、有馬玄蕃頭豊氏の家に散樂ありて、人々多く集り見る。柳生宗矩もこゝに行向かつて酒宴半ばなるに、日既に未の終ばかりになりて、宗矩が郎等來り主を呼出して、君は未だ知らしめされずや。肥前國高來の郡の土民、百姓等悉くに耶蘇の門徒にて、守護松倉殿に叛き、有馬の古城に立て籠るよし、筑紫より早馬來て告げ申すに依つて、板倉内膳正殿追討の御使を蒙り給ひ、はや御發向候ひぬ。と申す。宗矩聞きて、さらぬ體にて座に歸りて、亭主豊氏に向かひ、急ぎて宿所に歸るべき事出來て候。足早き馬貸し給へ。といへば、鞍置きて引つ立つ。急ぎ打乗りて、西を指して馳行き、品川に至りて、板倉は過ぎしや。と問ふ。今は遙

藩翰譜 十三卷。正篇十卷・附録二卷・凡例目錄一卷。元祿十四年、徳川家宣の甲府に在りし時、その命を以て新井白石の作りしもの。慶長五年より延寶八年までの一萬石以上の諸侯三百三十七家の傳記・沿革を誌せり。

柳生宗矩 新陰流劍法の名  
人。徳川家康に仕へ慶長  
庚子の亂に功あり。寛永  
六年從六位下但馬守とな  
り、後累進して一萬二千  
五百石を食む。將軍家光  
に信任せらる。正保五(一  
三〇八)年歿す。年七十  
六。  
寛永十四年 明正天皇の御  
宇。(二九七年)時に將  
軍は徳川家光。  
有馬玄蕃頭豊氏 久留米城

かに延びさせ給ふらん。と答ふ。鞍鐙を合はせて馳行き、川崎に至りてまた問へば、板倉殿は今、二三里も隔らせ給ふべし。と答ふ。日は既に暮れなんとす。せん方なくてひき返し、城に登る。

日はごく暮れてけり。近く侍ふ人を以て、宗矩申すべき事あつて伺候しぬ。と申しければ、やがて御前に召されて、何事にや参りし。と尋ねさせ給ふ。宗矩畏つて、今日さる人の許に酒盛し候に、筑紫にて逆徒起り、内膳正追討の御使を承り、馳向かふと承りしほごに、仰せの旨と稱し止めばやと存じ、馬を走らせて追ひかくれど、追付かず、日暮れ候ゆゑに、此の由を申さんごて参りて候。と申す。何に因りてか、重昌を止めんと致しけるぞ。と仰せ下されしかば、君は只管の土民、百姓等反逆せしと思しめさるればこそ、追討の御使かく軽く候ひ

主。從五位下に叙せられ  
玄蕃頭と稱す。島原の亂  
起るや、命を受けて之に  
赴く。寛永十九(二三〇  
二)年歿す。年七十三。  
散樂 歌舞音曲を備へて演  
ずる技藝にて能樂の前身  
なり。觀世・今春・金剛・寶  
生の四座あり。こゝにて  
は猿樂の能即ち能樂の意  
に用ひたり。  
松倉殿 松倉重次。父重政  
の時より島原の地を賜は  
りて之に居る。島原の亂  
後領土を沒收せらる。  
有馬の古城 長崎縣南高來  
郡口の津村原城。  
板倉内膳正殿 重昌。勝重  
の第二子。慶長十年從五  
位下に叙し内膳正と稱  
す。大阪の役に功あり、食  
邑一萬二千石を賜はる。  
寛永十四年島原の亂に征  
討使となり、翌十五(二  
二九八)年歿せり。年五  
十一。  
品川 東京府荏原郡品川  
町。東海道の宿驛。  
川崎 神奈川縣川崎市。

つれ。すべて宗門につきて起る軍は大事のものに候。此の定にては、重昌必ず討死仕るべし、如何にも謀りて止めばやと存じ候ひし。」と申す。以ての外に御氣色損じ、御座を立たせ給ふ。宗矩次の間に伺候して、夜更くれども罷り出でず。此の由を聞きしめて、重ねて御座に出でさせ給ひ、宗矩を召す。重昌死すべきは、何故かくは申すぞ。」とありし時、宗矩、さん候。それ兵の道は勇を以て旨と仕る。勇士は必死を懼れず。三軍の士をして盡くに死を懼れざらしめん事は、古の能く兵を用ふる者も及び難しと承りぬ。凡そ下愚の人、法を深く信じ候者は、我が法を固く守りて、死するを以て身の悦びとす。これ百千の衆、悉く期せずして必死の勇士と變ずるの術にて候。遠くためしを引くまでも候はず、織田殿兵威を以て伊勢の長島を攻めて、多くの大將を討たせ、諸卒を失ひ、年を重ねて

伊勢の長島云々 元龜元年十月小水江の城將織田信興、長島(三重縣桑名郡)の一向宗門徒の一揆の爲

やうく、に城を落さる。されど攝津の大阪の城をば、終に落し得ず、天子の勅命をかりて、仲直りして軍は終りて候。三河國の一揆は、近く御家の事に候。丟りし大阪の戦に、重昌未だ年若く候時だにも、數十萬騎の中に只一人選み出されて、大事の使承りたる者なれば、是等の兇徒を亡さんに何事かあるべき。且は當時御使承る上は、誰か其の下知に背くべきなご思しめされなば、事の違ひ候はんか。重昌が今少し位も高く、祿も厚く、又年頃重き職をも司りて、常に世にも人にも恐れ敬はれて候はんには、誠に能き御使にこそ候べけれ。今の重昌の身にて、西國の大名等の軍勢を催して城を攻めんに、一度は御使を承けたるに恐れて、其の下知に隨はんが、思ふにも似ず攻めあぐみて候はんには、重昌如何に思ふとも心に任すべからず。其の時に至りなば、御一門の人々か、さらず

に殺されしを以て、信長は翌二年五月之を征し、天正二(二二三四)年九月に至りて漸く之を陥れたり。  
大阪の城をば云々 元龜元年織田信長の野田福島城を攻むるや、石山本願寺(今の大阪城本丸はその舊址)之を助けて信長と戦ふ。後一旦和せしが、天正二年再び信長に抗す。信長之を攻圍して未だ勝つこと能はず。天正八年に至り正親町天皇の命を以て兵を收む。  
三河國の一揆 永祿六(二二二三)年に起りし一向宗の一揆。  
大阪の戦 慶長十九(二二七四)年、豊臣家と徳川家との戦。



ば宿老のうちを擇みて、重き御使に遣さるゝよりの外あるべからず。さあらんに因つては、重昌何の面目あつてか、生きて再び關東に還りて見参には入り候べき。あつたらしき御家人を失ひ候はん事は、永き天下の御恥辱にこそ存ずれ。あはれ宗矩御許を蒙らば、追付きて能くこしらへて召具して参り候べし。と、憚る所なく申しければ、御後悔の色見えさせ給ひしかど、更にそれも叶ひ難くや思しめされけん、夜いたく更けたり。罷り歸りて休み候へ。とあれば、宗矩御暇賜はりて、御前を退出す。

後に思ひ合はするに、宗矩が申しし所、掌を指すよりも明かにぞ候ひける。(新井白石「藩翰譜」)

蒼顔如鐵、鬢如銀、  
五尺小身、渾是膽、

紫石稜々、電射人、  
明時何用、畫麒麟。(新井白石)

### 七 芳宜園大人の靈を祭る

こゝに文化の五年九月八日、平春海謹みて芳宜園の大人の奥津城の御前に、菊の初花一枝を手向け、香の木一ひらを焼きて、うなねつきて申さく。

あはれ悲しきかも、君は吾に十こいひて一年の兄におはすなるが、今そのかみを思ひ出づるに、君は方に盛の齡におはして、吾はまだ童にてぞ侍りける。常に縣居の庭に物學びに行きかひたる時、朝に参ることは、君の御佩の後へに従ひ、夕べに罷ることは、君の御袖のまことに縋りて、相うるはしみまつれること、親子兄弟にも何か異ならむ。書讀むことは、君を師とも尊み、歌作ることには、吾を兄弟のつらにぞ教へ給ひける。中頃にして、君は仕への道に暇なくおはし、吾は世のさ

【参考資料】  
琴後集 十五卷。村田春海の和歌・文章を集録したるものなり。

芳宜園大人 加藤千蔭。國學者・歌人。文化五(二四六八)年歿す。年七十四。「かはほりの飛びかふ軒はくれそめてなほ暮れやらぬ夕がほの花」  
縣居 賀茂眞淵。國學者・歌人。明和六(二四二九)年歿す。年七十三。「信濃なる菅の荒野を飛ぶ鶯のつばさもたわに吹く嵐かな」

がにか、づらひて、自ら疎き方にも過ぎつるを、君仕へを退  
き給ひて後は、吾も同じ巷に移り住めば、花を尋ぬては、吾  
道しるべをなし、月を思ふては、君が舟に相乗り、憂き事も  
共に憂へ、嬉しき節も共に喜びて、世にありふるわざの、まめ  
事もあだ事も、互に隔てなく心をかはせること、今に二十年  
その初を繰返し數ふれば、あひ友たること、既に五十年にぞ  
餘りける。さるを、今後れ奉りて、いつの世にか相見む、何れの  
時にか言問はむ。常なきは人の身の習ひぞ。知れども、これ  
をいかでか歎かざらむ、かゝるを誰かはよく堪へむ。

あはれ悲しきかも。文の林世々に衰へ、言の葉の道日々に  
下り行けるを、賀茂の翁世に出でて、今を棄てて古に復り、青  
雲の高き心しらしを求め、倭文機の文あるみやびごころを貴  
みいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくる輩、かれに泥み、こ

くひぜを守り、宋人有り耕  
田者、田中有株、兔走觸

こにひかれて、猶怪しみとがむる類は多く、たまあひてよく  
うけひく人なむ稀なりしを、君ひこり心を起して、普く諭し、  
廣く誘ひしより、近き人はまのあたり相うづなひ、遠き人は  
遙かに靡き來て、古ぶりの歌、世に盛になりたるなり。

その自ら詠出で給へる歌を見るに、古き調新しき姿、こり  
ごりに備らざるはなし。その古を寫せるは、藤原寧樂の御世  
に及び、後のたくみに倣へるは、堀河鳥羽の御時に下らず。心  
に思ふ事は口に盡くさざる事なく、目に觸るゝものは、言葉  
に載せざることなむあらざりける。これを見て、高きも短き  
も、めでたふとまざる人なし。又事好みの人は、その名を君に  
知られては、身の面おこしと思ひて世にも誇り、君のひと歌  
を得ては、價なき寶にもかへじこいひてぞ深く喜びける。  
然るを、今黄金の聲忽ち止みて、玉の響再び聞えずなりぬ

舟にきだつくる 楚人有  
涉江者。其劍自舟中墮  
于水。遽刻其舟曰、是吾  
劍所從墜也。舟止從其  
所刻處、入水求之。舟已  
行矣、而劍不行。求劍  
若此、不亦惑乎。(呂氏  
春秋)

るは、わがごちの歎のみかは、大方の世の人の憂もいひつべし。これをいかでか惜しまざらむ、かゝるを誰かは慕はざらむ。

あはれ悲しきかも。わがかく言あげするを、泉の下にもさやかに聞召し、天翔りても遙かに看せこなむ申す。

〔村田春海「琴後集」〕

いづくより駒うち入れむ佐保川のさゞれにうつる白菊

の花 (香川景樹)

親泣けば子さへなくなり世の中のせむすべなさも何も知らずて (大隈言道)

宿かさぬ人のつらさをなさけにておぼる月夜の花のし  
たぶし (太田垣蓮月)

村田春海 國學者・歌人。江戸の人。文化八(二四七一)年歿す。年六十六。「心あてに見し白雲は籠にて思はぬ空に晴る、富士のれ」

### 八 芳流閣

古の人謂はずや、禍福は糾へる繩の如し。こ。人間萬事往くとして、塞翁が馬ならぬはなし。こは福の倚る所、はた禍の伏する所、彼にあれば此にあり、こは思へごも豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし犬塚信乃は、親の遺言記念の名刀、心に占めつ身につけつ、艱苦のうちに年を経て、得難き時を得てければ、遙々滸我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりつる、その福は禍に降りかはりたる村雨の、刃は故の物ならで、我が身を劈く讐なる、憾をこゝに釋く由もなく、事急にして意外に出づ。僅に當座の辱を、避けなんと思ふばかりに、許多の圍みを切開きて、芳流閣の屋の上に、攀ぢ登れども、こにかくに脱れ去るべき道の無ければ、其處に必死を極めた

#### 参考資料

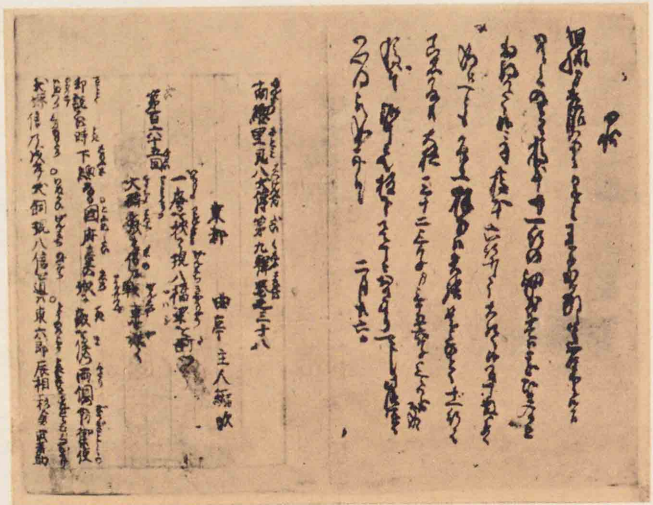
南總里見八犬傳 百六卷。里見氏の勇士、犬江親兵衛仁、犬川莊介義任、犬村大角禮儀、犬阪毛野胤智、犬山道節忠興、犬飼現八信道、犬塚信乃成孝、犬田小文吾、梯順の八人の事蹟を根據とし、之を仁義禮智忠信孝悌の八徳に配して組織したる歴史小説。文化十一年より天保十二年まで二十八年を費しし大作なり。

禍福は云々 漢書賈誼傳に「禍之與福兮、何異、糾纏」  
福の倚る所云々 老子に「禍兮福所伏、福兮禍所伏、孰知其極」  
滸我 茨城縣猿島郡古河。

る、心の中は如何ならん、思ひ遣るだにいと痛まし。

されば又犬飼見八信道は、犯せる罪のあらずして、月ごろ獄舎に繋がれし、禍は今恩赦の福、我が縛の索解けて、人にかからん捕手の役儀、犬塚信乃を搦めよ。さて、なまじひに擇みいだされつ。他の憂を身の面目に、今更用ひられんこと、願はしからずと思へども、辭みて許さるべくもあらぬ、君命重く彌高き、彼の樓閣は三層なり。その二層なる屋の上まで、身を翳ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へ難き頃、は六月二十一日、昨日も今日も乾蒸の、火照を渡る敷瓦は、うねり隙なく波に似て、下には大河滔々たる、こゝ生死の海に入る、流は名に負ふ坂東太郎、水際の小舟楫緒絶えて、進退既に谷れる敵にしあれば、いかで我、繋ぎ留めん。鼯の木傳ふ如く、さらくと登り果てたる三層の、屋根にはまぶ

坂東太郎 利根川の別稱。



(筆琴馬澤瀧)

しさを由もなく、互かたみに隙を窺ひつゝ、睨まへあうて立つたる有様、浮圖の上なる鶴の巢を、大蛇おろちの狙ふに似たりけり。

廣庭には成氏朝臣、横堀史よこぼり在村等の老黨若黨圍繞せる、床几に腰を打ちかけて、勝負いかに見上げたり。又閣たかごの東西には、腹巻したる許多の士卒、槍、長刀をきらめかし、或は箭を負ひ弓杖突立て、組んで落ちなば撃留めんこと、項を反してこれを觀る。加之そ、外方かたは、絲連いとづとして杳かなる、河水遶りて砌を浸せば、たこひ信乃武事、長け力衰へず、よく見八に捷ちたりとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、地上に下るべくもあらず。彼鳥ならねど羅に入りぬ、獸ならねど狩場に在り。三寸息絶えなば事みな休まん、脱れ果てじと見えたりけり。その時信乃思ふやう、初層二層の屋の上まで、追登らん

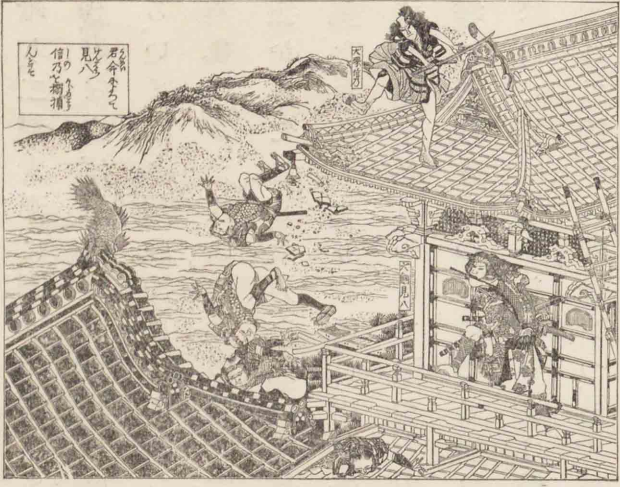
成氏朝臣 足利氏。持氏の子。鎌倉管領。後古河に住み古河公方と稱す。明應六(二二五七)年歿す。

墨氏 名は翟。周代の學者。

魯般 姓は公輸、名は般。周代の魯の人。故に魯般といふ。

せし兵等を、切落しつるその後は、絶えて近づく者なきに、今  
 唯獨り登り來ぬるは、世に覺ある力士ならん。きやつはこれ  
 膳臣巴提便が、虎を暴にせし勇あるか、また富田の三郎が、鹿  
 の角を折りし力あるか、遮莫一人の敵なり、引つ組んで刺違  
 へ、死ぬるに難き事やはある、よき敵にこそ御座んなれ、目に  
 物見せん、血刀を袴の稜もて押拭ひ、高瀬の如き方棟に、立  
 つたる儘に寄するを待てば、見八も亦思ふやう、彼の犬塚が  
 武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり、さりこても搦めかねて、  
 他の援を借る事あらば、獄舎の中よりこの役儀に、擇み出さ  
 れし甲斐も無し、搦め捕ることも撃たるゝとも、勝負を一時に  
 決せんものを、思ひにければちつとも擬議せず、御詫ごふ。  
 と呼びかけて、持つたる十手を閃かし、飛ぶが如くに方棟の、  
 左の方より進み登りて、組まんごすれごも寄せつけず、心得

膳臣巴提便 欽明天皇の朝  
 の人。百濟に使用し、雪夜  
 幼兒の虎に食はれたるを  
 憤り、虎穴を探りて虎を  
 獲たり。  
 富田の三郎 和田義盛の  
 臣。將軍實朝の御前にて、  
 二箇の大鹿角を重ねて折  
 る。



見八  
 信乃  
 犬塚  
 犬

たり。と鋭き太刀風に、撃つをはつしと受留めて、拂へば透か  
 さずこむ刀尖を、支へて流す一上一下、滑る藁を踏留めて、頻  
 りに進む捕手の祕術、彼方  
 りも劣らぬ手練の働、嵩より  
 流落す太刀筋を、あちこち外  
 圍す虚々實々、未だ勝負を分  
 のかざれば、廣庭なる主従士  
 戦卒は、手に汗握らざるもな  
 版く、瞬もせず氣を籠めて、見  
 挿る目もいご遙かなり。  
 得たりけり、思へば勇氣彌増して、刀尖より火出づるまで、

(畫挿本版)

こむ刀尖 刀尖のこみあふ  
 こと。

寄せては返す太刀音掛聲、兩虎深山に挑む時、錚然として風  
 發り、二龍青潭に鬪ふ時、沛然として雲起るも、かくぞあるべ  
 き。春ならば峯の霞か、夏ならば夕べの虹か、見るばかりな  
 る、いと高き屋の棟にして、死を争へる爲體、世に未曾有の晴  
 業なれば、見八は被籠の鎖、肱當のはづれを、裏かくまでに切  
 裂かれたれど、太刀を抜かず、信乃は刀の刃も續かで、初に淺  
 痕を負ひしより、次第に疼を覺ゆれども、足場を計りて、撓ま  
 ず去らず、疊みかけて撃つ太刀を見八右手に受流して、返す  
 拳につけ入りつゝ、やつと掛けたる聲と共に、眉間を望みて  
 はたと打つ、十手をちやうと受留むる、信乃が刃は鏑際より、  
 折れて遙かに飛失せつ。見八得たりとむんづと組むを、そが  
 儘左手に引著けて、互に利腕しかと取り、振倒さんこえい聲  
 合はせて、揉みつ揉まるゝ力足、これかれ齊しく踏滑らして、

河邊の方へころくゝ、身を輾ばする覆車の依坂より落す  
 に異ならず、勾配險しき棧閣に、削り成したる臺の勢、留るべ  
 くもあらざめれど、互に執つたる手を緩めず、幾十尋なる屋  
 の上より、末遙かなる河水の底には入らで程もよし、水際に  
 繋げる小舟の中へ、打累りつゝ、ごうと落つれば、傾く舷と立  
 つ浪に、ざんぶと音する水煙、纜ちやうと張切つて、射る矢の  
 如き早河の眞中へ吐出されつ。しかも追風と引く潮に、誘ふ  
 水なる下り舟、行方も知らずなりにけり。

（瀧澤馬琴「南總里見八犬傳」）

嫁のお路は人並ににじり書きもすなれば、教へて代寫せさ  
 せばやと、漸く思ひ返しつ。一字毎に字を教へ、一句毎に假名遣  
 を誨ふるに、婦人は普通の俗字だにも知るは稀にて、漢字雅言  
 を知らず、假名遣にてはだにも辨へず、偏傍すら心得ざるに、  
 たゞ言語をのみもて教へて書かする我が苦心は、いふべくも  
 あらず。果てはうち泣くめり。（瀧澤馬琴「馬琴日記」）

瀧澤馬琴 小説家。名は解。  
 嘉永元（一五〇八）年歿す。  
 年八十一。

### 九 史劇について

凡そ脚本中に描かるゝ事相は、人間事相の至醇なるものなれば、史劇に描かれたる事件・人物も、史の有りのまゝにあらざるべきはいふまでもなければ、巢林子の時代物はしかしがに架空に過ぎ、動もすれば夢中の變幻に似たり。現實なるが如く、過去なるが如く、條理あるが如く、條理なきが如く、有るべからざることの如く、有るらしきことの如く、人間の事ならざるが如く、人間の事なるが如し。随つて其の間に言動する人物の如きも、或は單純なる通有煩惱の如く、或は一殊性の權化の如く、或は超自然の腕力を有し、或は超人間の神通を具へ、勇なるは理外に剛く、智なるは法外に敏く、肉體上の器能の超人間的なること、殆ど其の性格の非人間的に

巢林子の時代物は云々  
關ふき越ゆる秋の風、霧  
晴れたる山城は、韃靼  
の軍將海利王がたて籠  
り、前は巖壁後は海、要  
害だのみの油断を見て、  
秋の夜討の國姓爺、乗つ  
たる駒の響蟲、月まつ蟲  
の聲すみ渡り、じんく、  
りんく、しづくく、  
と、堀ぎは近く攻寄せて、  
百千の高提灯、一度には  
つみ立てたるは、千世界の  
の千日月、一度に見るが  
ごとくにて、城の兵寢耳  
に水の、あわて睡いで背  
を脛當、鐘はさかさま、  
馬を背中にお、ハ、ハ、ハ、  
、大手の門をおし開き、

單純なるに比例す。されば巢林子の時代物を讀むや、吾人は毎にシエークスピヤのそれを讀むの感あり。即ち巢林子の時代物は、過去の事相若しくは人物を描かんが爲に綴られたるにはあらで、寧ろ縦横に人情を描寫せんが爲に、時處と人名とを過去に借りたるものとなすべきのみ。

然るに、河竹默阿彌の時代物を見るに、彼が晩年の作に係る史劇は、時尙の變遷につれて、近松のそれとは大いに趣を異にし、彼はひとへに通有煩惱を描寫せん爲に時處を過去に借りての陳套を脱して、寧ろ過去そのものに重きを置き、野史若しくは講談師等の語る所によりて、過去の事蹟と人物とを想像し、多少過去の事件を再現し、史の人物を描寫せんとを心ありて、新時代物に筆を著けき。かるが故に、彼の描寫せる人物事件は、尠くとも超自然のものにあらず。固より其の

斬つて出づれば寄手の  
勢、貝鐘ならし鯨波の聲、  
大將團扇おつ取つて、ひ  
らりく、ひらりく、ひら  
りひらめかし、日本流の  
軍の下知、攻めつけひし  
ぐは義經流、ゆるめて打  
つは楠流、俱利伽羅おさ  
し阪おさし、屋島の浦の  
浦波も、こによせ手の  
勢強く、もみ立てもみ立  
て切立てられ、城中さし  
てぞ引たりける。(近  
松門左衛門「國姓爺合  
戦」)  
シエクスピア 英國の劇詩  
人。英國の南部なる羊毛  
商の家に生まる。不十分  
なる教育を受け、一五八  
五年ロンドンに赴きて俳  
優となり、次いで劇作に  
従事す。Shakespeare  
(一五六二—一六一六年)  
河竹默阿彌 劇作家。晩年  
は専ら古河默阿彌と稱  
す。明治二十六年歿す。  
年七十八。「默阿彌脚本  
集」二十卷あり。



憑據せし所の甚しき虚妄の俗説なりしと、其の學殖識見の、かゝる題目に適せざりしことによりて、其の作の出来ばえは未だ善美なる能はざりしが、その時代物の局面は、此の時より一變し、荒唐無稽なる傳奇的要素は大いに減じ、その間に言動する人物の如きも、なほ十分なる個性を具せず、正史の人物に遠きにも拘らず、こにかく過去の人物となり、其の言語動作は、個性ありげなる人物となりぬ。これをかの巢林子の作なる夢幻的、若しくは超自然的人物、若しくは性情能力の權化に似たるものに比ぶれば、一段の變化轉遷といふことを得べし。

予が默阿彌を以て歴史的寫實主義の端を發き、所謂活歴史劇の爲に導火を點じたるものこそなすはこれが爲なり。即ち、かの近松半二、並木宗輔、並木五瓶、櫻田治助、鶴屋南北以來、

默阿彌の時代物云々  
家康「ほ、お、今に初めの清正殿の比類なき手柄の段々」。利家「小西殿を町人と言ひしも異國に對する日本のはれ」。侍一「誹謗せし實に尤も。侍二「我々感心いたしてござる」。大關機嫌うるはしく。秀吉「まつた豊臣名乗りしも、申譯の相立つ上は一旦の勘氣を許し、五年が間朝鮮にて苦戦したる恩賞に、今日より改めて豊臣の姓を許し遣す」。清正「すりや御勘氣御免の、その上に拙者に豊臣の姓を下し賜はるさか。有り難う存じ奉る」。三成「御連枝の外お許しなきに、何故あつて清正に」。秀吉「お、連枝に等しき縁者故」。三成「なに、縁者さ」。秀吉「ほ、お、不審は尤も。清正が母なる者は大政所と從妹故、我には近き間なり。豊臣を讓つても苦し

久しく常套となりたる時代世話混淆の草双紙式の脚色を破つて、こもかくも比較的單純なる講談式、實録式の新史劇を書き始めたは、主として彼の努力といはざるべからず。然れども、彼もこより正史類を讀破し得る學力ありしにあらず。況や複雑なる治亂興廢の理路を釋ねて、奸邪忠貞の肺肝を探り、これを心理的に分析するが如きは、彼の能くせざりし所なり。彼の直覺と悟入とは、未だ過去、現在、未來の三世を透貫して、一如を觀ずること能はざりしなり。彼の詩人的想像は楠公の苦忠、豊公の英略、若しくは幸村の義烈を語りて容易くこれに及びたらめど、其の現在に泥みたる觀念は、到底甚しく時勢境遇、位階、器度、風俗、情操を異にしたる過去人を洞觀するに及びざりしなり。彼の觀察は又平民に偏し、細川勝元、大岡越前守等の性格をすらも、只仰ぎてのみ觀察

からざる縁者の清正。家康「かゝる御縁あるとは只今まで知らざりしが」。利家「何にいたせ、清正殿には御勘氣御免のその上に、豊臣の姓を賜はつて」。三成「さぞ大慶に」。皆々「ござりませう」。言ふに清正勇み立ちし。清正「今日は如何なる吉日か、身の憂き雲も吹きはれて、日本晴かいたしてござる」。秀吉「唯今勘氣を許せし上は、和睦破れし朝鮮へ、汝再び討手に向かひ、我が存念を果してくれよ」。清正は、仰せにや及ぶべき。五年この方かの地に居り、山川田野の地理に明るく、假令明朝百萬なりとも討滅し、髮唐人の耳を切り、君へ土産に奉り、目出度凱陣仕らん」。勇み立つたる清正が言葉の如く、耳塚の古跡を後に殘しけり」。默阿彌「桃山譚」近松半二 淨瑠璃作家。大

したりき。彼はや、現實に近き幕府の役員をすらも、町奴若しくは町家の主人を観るが如くには観得ざりき。彼は彼等の肺肝に入ること能はず。随つて曾て同化する能はざりき。況や大過去の史的人物に對しては、彼が超凡の想像力も屢々茫然たる所ありしならん。蓋し彼の最も難んぜし所は語(白)なりしが如し。假令彼の想像力は能く史的人物の肺腑に入るを得たりとするも、彼はこれを紙上に再現するの術なきに苦しみしならん。併しながら、假令作家その人にシエークスピヤの如き天才ありとも、絶えて權家若しくは禁園に入したることなく、又よく古來の史傳に通ぜざりせば、王侯相將の性情言動を描きて、その神に入らんこと難かるべし。されば、一切の史的材料及標準を卑俗なる野史と謬妄淺劣なる講談とに採りし默阿彌の史劇が、他の巧なる世話物

七四  
阪の人。天明三(二四四三)年歿す。年九十九。  
並木宗輔 浄瑠璃作家。大阪の人。寛延二(二四〇九)年歿す。  
並木五瓶 浄瑠璃作家。大阪の人。後江戸に下る。文化五(二四六八)年歿す。  
櫻田治助 劇作家。文化三(二四六六)年歿す。年七十二。  
鶴屋南北 劇作家。江戸に住す。文政十二(二四八九)年歿す。年七十五。  
草双紙 一種の短篇小説。多くは平假名にて書き、中に挿畫あり。徳川時代に流行せり。  
幸村 眞田幸村。豊臣秀吉の臣。關原の役に西軍に屬し、敗れて紀州九度山に潜む。後秀頼に仕へて元和元(二七五)年大阪夏の陣に戦歿す。  
細川勝元 室町幕府に仕へて管領たり。山名持豊と争ふ。文明五(二一三三)

に比して、殆ど別人の作の如く拙きは、將に是非もなき結果なるべし。

默阿彌によりて端を發かれたる活歴的史劇は、依田學海によつて助長せられ、更に福地櫻痴に至つて大成せられたり。されど、此等の活歴的史劇が默阿彌に比して優る點は、所謂正史に依據する度の一段深くなりたること、其の人物の性格が、何となく高尚にも優美にも感ぜらるゝやうになりたることにあるのみにて、史劇としての内容は、依然として非論理不自然にして、未だ舊臺帳の域を脱せず、而も詩趣に於ては遙かに近松に劣り、又實上演上の劇的效果に於ては、默阿彌に比すべくもあらざりき。

惟ふに、凡そ脚本の精髓は、個々の人物の性格を根本因として、其の周圍の事情境遇等を縁とし、此の複雑隱微なる因

年歿す。年四十四。  
大岡越前守 大岡忠相。徳川幕府に仕へ、町奉行より寺社奉行に轉じ、奏者役を兼ね。寶曆元(二四一一)年歿す。年七十五。  
依田學海 漢學者、劇作者。名は朝宗。下總佐倉藩士。明治四十三年歿す。年七十七。  
福地櫻痴 文學者。名は源一郎。慶應元年江湖新聞を發刊す。明治七年東京日日新聞を創む。後衆議院議員たり。明治三十八年歿す。年六十五。

縁の間に成る強大著明なる業果を寫破して、以て髣髴として人間事相の眞實平等體を現ぜしむる所にあるべし。而して所謂史劇とは、件の個々の人物をば専ら過去の世間に取り、且つこれを過去の特殊なる事情境遇の裡に立たしめて、千古唯一體なる自然と人間との平等旨を殊なる過去相の中に現示せんと力むるもののみ。時代物も世話物も、其の骨髓の旨は一なり。或はこの平等旨を過去の差別相によりて寫破し、或はこれを現世の相によりて寫す、さるは作家の方面よりは、たゞ最も實現し易き材を取るに外ならざるべし。かるが故に、模糊縹緲の間に因縁果報の旨を現ずることは、主にして過去相を實寫することは、實に贅なり。換言すれば、個性と外界との複雑靈妙なる關係を描破するは根幹にして、史的事件と史的人物とを實寫するは枝葉なり。更に具さにこ

因  
事  
境  
實  
異  
異  
異

れをいへば、史劇の最も重んずる所は、個々の性情と其の殊なる周圍事情境遇、即ち最も廣き義に謂ふ時勢との關係にして、俗に所謂正史の、其の實頗る信憑すべからざる記事に拘泥し、概して黨派又は國教などの、往々にして偏狹なる批判より成れる想像臆測の史論若しくは人物論に執著し、以て無味乾燥なる史的事件を聯絡なく再現し、且つ平淡にして非詩歌的なる人物の外相のみを殆ど叙事的に其の間に點綴するが如きは、そもく末なり。

畢竟するに、史劇の過去相は假面ののみ、人間世の因縁果報を現ぜん方便のみ。而して假面の用は、觀る者をして姑く其の假面たるを忘れしむれば足れり。何を苦しみてか曖昧不完全なる傳說的假相を實寫することをなさん。史劇の再現する所、頗るよく個々性と外界との關係を描寫し、謂ふ所の

因縁・果報の旨趣をほのめかし得たらんか、吾人また更に何をか需めん。彼の道具・衣裳等を考證し、事蹟・年月・地理等を穿鑿し、用語・態度等に細心するは、畢竟この幻影を呼ばんためのみ。要は英雄の幻影を描出するにあり。

（坪内逍遙「逍遙選集」による）

「人生は短し、藝術は壽し」といへり。然れどもこは果して古今東西幾何の文學・藝術にか適用せらるべき。英雄・豪傑の偉業は槿花一朝の榮にして、星霜を重ねるとともに、空しく山丘と化し了れども、ひとり文學者・藝術家の大作は長へに日月を懸くといふ、げにや世に玩賞せられて、一時の忘我・遊神の用に供せらるゝ程度のもは少からず。而もさばかりの功用にては、六尺の男子が心血を濺ぎ、壽命を縮めて、刻苦經營すべきものなるや否や、甚だ疑はしといはざるべからず。唯それ文學・藝術はその作用に於いて忘我・遊神以上に幾段を進めて、他を同化せしむる力を具へざるべからず。然らずんば未だ眞の藝術作用となすべからざるなり。（坪内逍遙「作と評論」による）

坪内逍遙 文學博士。名は雄藏。安政六年尾張に生まる。東京帝國大學文學部出身。早稻田大學名譽教授。

一〇 ハンニバル

英雄の成敗は千古傷心のこゝ少からず。雖も、東西古今を通じて、ハンニバルの事の如く悲しきはあらざるなり。幼齡九歳の彼が、その父に伴なはれて神の卓前に立ち、國讐たるローマを畢生の敵とすべきを誓はしめられたるより、その終焉に至るまで、一念常に國讐を報ずるにあらざるものなし。彼は二十七歳、一生の花とも稱すべき時、大兵を帥ゐて敵國に侵入せしより以來十六年、苦を兵間に積み、曾て人生室家の樂みを享けたることなし。大功成るに垂んとして果さず、ローマに窮追せられて諸邦の朝廷に流寓し、終に毒を仰いで斃る。嗚呼、人生の慘なる、復この人の如きを見ざるなり。

ハンニバル カルタゴの勇將。西紀前二四七—一八三 Hannibal.

ローマ 羅馬帝國の首府。西紀前五〇年より三〇年までは共和國にして、後に帝國となる。Rome.

若し彼をして尋常人ならしめば、亦深く悲しむに足るものなし。然れども、その用兵の略は優に古今名將の上に出で、外交に敏に、政務に達し、賢に禮し、士に下り、學を好み、民を愛す。彼は武ありて文なき粗暴家にあらず、文ありて武なき文弱人にあらず。その人格上に一點の非議すべき所なく、而してその末路かくの如し。これ特に人をして傷心に勝へざらしむる所以なり。

地中海を隔てて南北に對峙するものは、ローマ・カルタゴの二共和國なり。天は兩雄邦の竝立を許さず、彼滅びずんば、此興らず、彼衰へずんば、此盛んならず。ローマ人は戰鬪を事とする尙武の民なり、カルタゴ人は貿易を主とする平和の民なり。カルタゴ人をしてローマ兵と戰はしむるは、羊を驅つて狼に向かはしむるが如し。況やハンニバルの事に當り

カルタゴ 初は世界貿易の中心地。後にローマに滅せむ。 Carthago.

しは、既に其の國一たび痛撃を受けたる後なるをや。本國人の頼むに足らざるを知り、乃父の遺志を繼いで兵を屬領に募り、これを以て強敵に當らんことを固より既に非なり。彼豈これを知らざらんや。知つて而してこゝに出づる、また實に勢の已むを得ざるものあればなり。

彼が志を決して、イスパニヤを發するに臨み、その兵幾んど十萬と號す。然れども、ピレネーの峻嶺を越え、アルプスの難路を過ぎ、了へしとき、その兵已に四分の一に減ず。彼がローマの北野に進みしときは、見兵僅に二萬五千に過ぎざるなり。その途上に於て兵士の怨嗟を聞くや、彼は寛大にも軍中に令して曰く、去らんことを欲するものは去れ、從ふことを樂しむものは來れ。と、この時に當りて將軍を棄てんとするもの數千人なりきと雖も、なほ二萬餘の兵は死生を共にせん

ピレネー フランスとイスパニヤとの國境の山脈。 Pyrenees. アルプス 歐洲最大の山系。 Alps.

ここを誓へり。而してその兵はイスパニヤ及びゴール北部諸種の蠻族より組織せるもののみ。決してかの愛國心燃ゆるローマ兵の比にあらざるなり。蕪雜烏合のこの兵に對して恩威の大なるものあらざるよりは、焉ぞよくかくの如くなるを得んや。古今偉功を奏せし將帥を見るに、その兵士は多く統一せる國民にして、愛國心あるものにあらざるはなし。唯それハンニバルに至つては即ち然らず。その將士はその將軍に對して、單に恩威を感じずのみ、實に愛國の要素を缺けり。この異様の兵を率ゐて、かの將來印度以西を統一すべき運命を荷へる勇壯絶倫、愛國無雙のローマ人に敵對し、一たびは幾んどこれを壓服せんとしたるなり。嗚呼、この人の外、千古復かくの如き人あらんや。

ゴール人種の名。ケルト人の一派。Celti.

なり。アレクサンドル、フレデリック、ナポレオンと雖も、その上に出づるを得ず。これ余の私評にあらず、歐洲史家の通論なり。わが兵と敵兵と強弱勇怯既に懸絶せるのみならず、敵は毎に大兵にして、我は毎に寡兵なり。然るに猶奇戰には謀略を用ひ、正戰には戰術を用ふ。かのカンネーの大戰を見よ。彼の兵數は敵軍の半ばにも當らざりしにあらずや。しかも堂々たる正戰に於て、彼は巧妙なる戰術を用ひ、敵軍をして七萬の死屍を戰地に遺して潰敗せしめたり。かくの如き全勝は、歴史上實に稀有の事なりとす。戰地に斃れたるローマ貴族の指より集めたる金の指輪數斛を、彼の使者が本國に齎し歸りて、これを國會に示せる時、その國人の驚喜はそれ幾何なりしぞ。この大勝に乗じて、直ちにローマを衝かざりしは、後人の憾むる所なりと雖も、その兵や固より多からず。

アレクサンドル マケドニア國王。Alexander. (西紀前三五六—三二三)  
フレデリック プロシアの王。Frederick. (一七一二—一七八八)  
ナポレオン フランス皇帝。Napoleon. (一七六九—一八二一)  
カンネー 伊太利アブリーヤの一市。Cannae.

加ふるに戦後の疲憊を以てす。今この危道を行かずとも、一方に於てはイタリヤ南部の城邑は皆遙かに款を送る勢あり。彼を捨て此を取る、亦理なしとせんや。この戦の夕べ、一部將が、我に三千の騎兵を與へよ。將軍の爲に直ちにローマを衝き、二日を出でずして、將軍をしてローマの城中にて晩食せしめん。と獻策せし時、彼既にその得失を知る。必ずしも後人の非議を俟たざるなり。

かの國人は必要大切の場合にも、曾て十分の援兵を彼に送りしことなく、十分の金穀を彼に與へしことなし。これ彼が十六年間敵國を蹂躪しながら、遂にその成功を最後に誤りし大原因なり。實に本國人民の罪にして彼の罪にあらず。かくの如くにして、彼は十六年間、自ら兵を他國に募りてその缺を補へるのみならず、その金穀も常にこれを敵國に取

れり。その忍耐の大なる、亦その智略と並行すと謂ふべし。

彼は善く戦へり。彼は巧みに外交を繰縦せり。然れどもその本國は却つて敵の侵入を防ぎ得ず。勢の救ふべからざるに及び、彼を召喚してこれに當らしむ。嗚呼、亦遅し。彼の智勇もこれを如何ともする能はず。しかも猶この存亡の秋に在つて、敵と講和の約を結び、國人をして小康を得しめ、一方には財政を釐革し、一方には憲法を修正し、下層人民の愛國心を涵養し、國帑の急を緩め、莫大なる償金を年々支辨し得る途を畫策せり。彼豈尋常の一武弁ならんや。彼をして平時に出でしめば、必ずや治平の良宰相たらん。

その未だ本國に召喚せられずして、ローマの野に轉戦するや、兵寡く食竭く。恢復の望は單に懸けてその實弟ハストルバルがイスパニヤより援軍を率ゐて來り合するにあり

しなり。然るに天は衰邦に祚せず、彼の弟はイタリヤの北野に破られ、彼が手を握りて久別の喜を叙せん。と樂しみたるその人の首級は、敵の槍鋒に貫ぬかれて、遙かに我が營前に現れたり。嗚呼、人生悲慘のこゝ多し。雖も、未だこの人のこの時の如きはあらざるなり。

彼が遙かに弟の首級を望みける時、我今カルタゴの運命を知れり。と歎ぜし一言は、如何に無限の悲痛を含みしぞ。尋常骨肉の情よりするもなほ忍ぶ能はず。況や自國の興亡はこの援軍の勝敗に懸かれるをや。史を讀んでこゝに至り、卷を掩うて長嘆せざるもの果して幾人かある。出師未捷、身先死の五丈原頭の武侯や、盡忠報國の黥文を露はして餘杭の市に斬られたる岳武穆も、亦何ぞ比するに足らん。彼の戰略、戰術が人目を眩耀するがために、人或はその名

五丈原 支那陝西省鳳翔府郿縣。  
武侯 諸葛孔明。名は亮。餘杭 浙江省杭州府。岳武穆 名は飛。武穆はその諡號。

將たるを知つて、その人格を察せず。若し能くこれを究めば、その不幸を悲しむ情、轉た深きを加へん。千古傷心の事實にこの人の一生の如きはあらざるなり。(矢野龍溪「戰時畫報」)

矢野龍溪 政治家・文學者。名は文雄。嘉永三年豊後國に生まる。慶應義塾に學べり。

英雄には髀肉の歎といふ事がある。文人には筆硯生塵といふ事がある。余も此の頃、錐鏑を生ずといふ歎を起した。此の錐といふのは千枚通しの丈夫な錐で、これを買つてから十年餘りになるであらう。これは俳句分類といふ書物の編纂をして居た時に使つて居たもので、其の頃は毎日五枚や十枚の半紙に穴をあけて、其の書中に綴り込まぬ事はなかつた。それ故、鋭利といふわけでは無いけれど、錐の外面は常に光を放つて極めて滑かであつた。それが今日不圖手に取つて見たところが、全く錆びてしまつて、二三枚の紙を通すのにも鏑の爲に妨げられて、快く通らない。俳句分類の編纂は三年程前から全く放擲してしまつて居るのである。(正岡子規「病牀六尺」)

正岡子規 俳人・歌人。名は常規。松山市の人。俳句、和歌の革新に功あり。明治三十五年歿す。年三十六。



### 一 一 新しい詩の生誕

新しい詩の生まれる時代は美しい夢を追ふ時である。憧憬の眼を輝かして聲朗かに高く歌ふ時である。日清戦後、國民的自覺の精神が強められると共に、社會は活氣づき、人氣は湧立ち、文壇は著しく勃興の機運に向かつた。こゝに明治文學の第一躍進時代が來たのである。創作に、評論に、新人が活躍した。しかも全體を通じてロマンチックの色彩が強く、詩歌の勃興を促した。新體詩、俳句、短歌などの上に華々しい革新運動が起つた。そしてそれが或程度まで成功の美果を収めたのである。新體詩の革新と勃興とは、特に著しいものがあつた。それは機運の成熟にもよつたが、一つは島崎藤村、土井晚翠等を中心に、薄田泣菫、蒲原有明等が輩出して詩壇

ロマンチック 文藝上にて感情又は空想を偏重する主義。 Romantic. 俳句の革新 正岡子規によつて唱へらる。和歌の革新 落合直文等によつて唱へらる。

島崎藤村 一三八頁参照。  
土井晚翠 名は林吉。仙台の人。第二高等學校教授。

に盡くした爲であつた。

明治三十年八月に出た島崎藤村の「若菜集」は、詩界の混沌を破つて若き日本の詩の向かふところを知らしめたエポックメイキングの一産物であつた。内容、詩形、詞藻の上で、藝術的一致を具現した最初の詩集であつた。詩界の黎明の色はこれによつて濃度を加へて來た。

藤村が「若菜集」を出して、新體詩人としての顯著な成功を得たわけは、(一)專念ヨーロッパの詩に讀耽つて、スキンパアン・ロセッチ等の影響を受けたこと、(二)詩形用語の上に細心の注意と研究を傾けたこと、(三)藝術的氣稟が豊かで、新代の感情を代表的に詠出したこと、(四)敘事、抒情、兩面に於ける才能を備へたこと、(五)國文學、支那文學の素養が相當にあつたことなどによるであらう。藤村の詩には勿論彼の個性の

薄田泣菫 名は淳介。岡山縣の人。大阪毎日新聞學藝部長。  
蒲原有明 名は準雄。東京の人。  
若菜集 藤村が雑誌「文學界」に「帝國文學」等に寄せし新體詩五十篇を集録せるもの。  
エポックメイキング 新時代を劃する如き。 Epoch-making

スキンパアン 英國の詩人。批評家。一九〇九年歿す。年七十二。 Algernon Charles Swinburne.  
ロセッチ 英國の詩人。畫家。一八八二年歿す。年五十五。 Charles Dante Gabriel Rossetti.

色彩句はあるが、詩人として奔放な情想を披瀝したロセツチや、バイロンの再生と稱せられたスキンバアンの官能的な抒情の歌などに影響せられたことは否まれぬやうである。それに彼自身有り餘るほどの情熱を抱いて、孤獨の境漂泊の旅などに自然の美を思ひ、憧憬愛慕の感に身を浸したのである。それからの體驗を透して、彼は青春の人々の感情を直覺して、それを烈しく、若菜集に詠出したのである。しかも彼には、藝術的に細心な用意があり、修練があり、優れた技巧があつたから、その詩の上に何等の破綻をも示さなかつたのである。かうして、若菜集が劃期的な痕を詩壇に印したのは當然のこゝである。

勿論、今日から見ると、若菜集にはセンチメンタルな傾向が多くて、餘りに夢を見過ぎたやうなところがある。人生に

バイロン 英國の詩人。二十九歳にして再びイギリスの地を踏まざらんことを期して大陸に渡り、西曆一八二四年ギリシヤの獨立戦争に投じて歿せり。年三十八。George Gordon Byron.

センチメンタル 感傷的。Sentimental.

對して高踏的・逃避的な點があるが、さうした缺陷があつても、若菜集の美點は決して傷つけられない。そこに永遠の美しい夢があるからである。消しても消しても、消えさらぬ情熱の噴泉があるからである。若菜集中の秀拔な詩は、どれであるか。云ふこゝについては、各自の好みがあらう。私は「秋風の歌」「深林の逍遙」「四つの袖」などを推したい。

「若菜集」で成功した藤村は、向上の一路を歩むことを忘れなかつた。その翌年の初夏には「一葉舟」を出し、冬には「夏草」を出して、彼の詩的心境の推移を示した。「一葉舟」には、彼の情熱に一味の沈靜を加へた跡が見える。「夏草」には、藤村がロマンスの世界から現實の世界へ移つて行かうとした心持が見える。この傾向は三十四年に出した「落梅集」に至つて一層具體化された。センチメンタルリズムの殻を破ることは、可なり

「秋風の歌」の一節。  
すゞしいかなや、西風の  
まつ秋の葉を吹ける時、  
さびしいかなや、秋風の  
彼の紅葉葉に來たる時、  
道を傳ふる婆羅門の  
西に東に散るこゝろ、  
吹きたよよはす秋風に、  
飄りゆく木の葉かな。  
朝羽うちふる鶯鷹の  
明闇天をゆくこゝろ、  
いたくも吹ける秋風の  
羽に聲あり力あり。  
一葉集 春やいづこ、鶯の

に困難であつたが、藤村は力めてそれを打破つて現實の上に自己の新しい地盤を築きあげようとしたのである。その「夏草」や「落梅集」の中では「晩春の別離」「農夫」などにも心を引かれるが、寧ろ淡々たる「小諸なる古城のほごり」の哀音が惻々として胸に響くのである。

情熱の詩人藤村に對して、冥想の詩人土井晩翠が居たのは好個の對照であつた。藤村は女性的、晩翠は男性的、一は考へるよりも先づ鋭く感じ、一は感ずるよりも先づ深く考へた。前者は優雅清新の致を具し、後者は雄健豪放の趣を備へて居た。そしてその何れもロマンチックであつた。

晩翠の詩的成功の素因は、(一)當時彼の如き冥想派の詩人が殆ど居なかつたこと、(二)詩的表現の明快であつたこと、(三)男性的風格に富んで、しかも粗放蕪雜に流れなかつたこと

などである。彼の最初の詩集は、明治三十二年に出した「天地有情」である。そこには、主觀的に人生に對して現實の悲痛無情を嘆き、一個理想の天地に憧憬を寄せた詩人の胸懷が明かに洩らされて居る。その詩思の上によつて居るのは、燃ゆるやうな青春の情熱ではなくて、理智に根ざした哲理的な思想の流れである。「暮鐘」は殊にその中で優れた詩篇である。

晩翠は「天地有情」に次いで「曉鐘」を出した。それには、以前よりも現實味が加つて、技巧が進んで居たが、その詩想の上では何等の向上を見せなかつた。詩的生命の流動が遅緩になつて居た。蓋し彼は藤村のやうに、自己の進路について反省し凝思しなかつたために、早く行詰つたのである。

藤村・晩翠よりや、後れて出た青年詩人中の雙璧は、薄田

歌「銀河・白磁花瓶賦」きりぎりすの五篇の詩及び、利根川だより・木曾谷日記・七曜のすさびの三篇の散文を集録せり。  
夏草 晩春の別離・曉の誕生・二つの泉等の十四篇の詩集にて、詩風は著しく積極的・樂天的となれり。

ロマンス 空想。Romance。落梅集 千曲川旅情の歌・胸より胸に・壯年・椰子の實などを收む。  
小諸なる云々 卷四「小諸なる古城のほごり」参照。

天地有情 希望・雲の歌・花と星・星落秋風五丈原・暮鐘などの四十篇の詩集。卷六「出處」参照。

「暮鐘」の一節。

祇園精舎の檐朽ちて  
葦酒の香のみ高くとも、  
セントソヒヤの塔荒れて  
福音俗に媚ぶることも、  
聞けや、夕への鐘のうち、  
靈鷲・椀櫃いにしへの  
高き尊き法の聲。

天地有情の夕まぐれ、  
わが騰鷲の夢さめて  
風樓いつか跡もなく、  
うつしは跳き春の夜や。  
峯上の霞たちきりて  
縫へる仙女の綾ころも、  
袖に風はつらくとも、  
自然の胸をゆるがして  
響く微妙の樂の聲。

泣菫と蒲原有明とである。泣菫は大體に於て藤村と同じ行き方をした。最初はロマンチックの情想に浸つて居た。ところが二三年の後には、一轉して現實に親しみ、美しい夢よりも當面の現實に興味を見出すやうになつた。それらが藤村の歩いた道によく似て居ると同時に、恐らく泣菫には藤村から少からぬ感化・影響を受けた時期があつたらうと思はれる。

泣菫の最初の詩篇「暮笛集」は明治三十二年に出た。彼は、暖かい情緒と溢るゝやうな才氣を持つて居た。そしてイギリスの詩人シエレー・キイツなどに私淑して、「希臘古瓶賦」西風の歌などを愛誦したものだと思はれる。さうした影響もまた彼の詩のうちに見出される。「暮笛集」の熱烈な情操と清新典雅の格調とは、最初から泣菫の詩的成功を著しくした。

その一音はこゝにあり。  
曉鐘 三十四年出版、萬里  
長城の歌・秋興八首・黒  
龍江上の悲劇・霹靂など  
の二十一篇の創作詩及び  
ユトゴの詩三篇を載せ  
たり。

暮笛集 詩のなやみ・鶴鶴  
冬の歌・兄と妹・尼が紅な  
ご四十五篇の詩集。

シエレー 一〇四頁参照。  
キイツ 英國の詩人。始め  
醫に志し、後文學に身を  
委ぬ。西曆一八二一年イ  
タリヤに客死せり。年二  
十七。John Keats「希臘  
古瓶賦」はその作なり。

そして彼は明治三十四年に至つて、行く春を出した。こゝにも「暮笛集」時代の名残を見ることが出来るが、一方に於て、泣菫が農民・田園を始め當面の時事問題などにも眼を注いで、彼の詩想をそれらに奔らせたものが往々見える。石彫獅子の賦は彼の秀作である。雄麗の趣に於て、泣菫の詩中、特異とすべきものであるが、泣菫の缺點は、内容よりも詞藻の上により多く苦心して、こもするこ美しい言葉に囚れやすい傾があつたことである。或意味に於て、彼は詞藻美の詩人であつた。藝術至上主義者であつた。で、詩形などの上でもいろいろの工夫を凝らした。八六調その他に苦心を重ねて、不退轉の熱心を示した。けれども思想的・情意的に飛躍すべきことを彼は閑却して居た。

蒲原有明は、泣菫よりも稍深みのある詩人であつた。少く

行く春 牧笛・夕暮海邊に  
立ちて・夕の歌・泉・遠情  
石彫獅子の賦など二十九  
篇の詩集。

「石彫獅子の賦」の一節。  
裂けたる岩に瓜かけて  
雄々し、憤るかの姿、  
鬚ながく背にまきて、  
見れば湧きよる春の潮。  
胸はゆたかに力男が  
引きこぼりたる弓のこ  
こ。

忿怒現する明玉の  
ひろき肩より燃上がる  
焰か、ながき尾は躍り、  
綿毛密なる脚の裏、  
落ちて野薔薇の花踏む  
も、  
巢くへる鳥は眼ざめん  
や。

こも思想的に彼は内在する生命を掴まうとする傾向を持つて居た。草わかばは彼の最初の詩集で、靈的神祕の境地に觸れようとした。そこから来る煩惱や悶えや淋しさを歌つたのが、三十六年に出た「獨絃哀歌」であつた。有明はロセツチに私淑した傾向があつたので、「獨絃哀歌」にはさうした影が印せられて居た。そして神祕の色と詩的情想とが一つに解けあつて、有明の特色個性が漸く滲み出て居た。

以上の四詩人は、何れもロマンチズムの時代を代表する人たちである。そしてこの期の一特質として見るべきは史詩の流行であつた。それは過去の歴史人物などの美に對する強い憧憬が中心となつて、史詩を生んだのである。スコットが中世の騎士に憧憬したのと同趣である。白星の「釋迦」おさよ新七、鐵幹、林外、白星等の合作「源九郎義經」、岩野泡鳴の

草わかば 三十五年一月出版。序の歌「日神頌歌」牡丹の殻・彩雲などの十八篇を黎明・新譜の二部に大別せり。  
獨絃哀歌 さまよひの歌・優曇華・憂愁・幻影・獨語などの二十七篇を煩惱・紫蘇の葉の二部に大別せり。  
「獨絃哀歌」の中の「幻影」の二聯を引く。  
今眼に入れるかげ見れば  
小鏡は浪に燃え浮かび  
鏡のおもてはかゞやきて  
火もて描ける火の少女。

幻影はげにこゝに盡き、  
小鏡は浪に沈むさき、  
わが身縋の琴の絃、  
火の小指もて誰か弾くべき。

スコット 英國の小説家・詩人。始め法律を學びしが、後文學に身を委ね好んで傳奇小説を作れり。西曆一八三二年歿す。年

「豊太閣」「田戸の海ぬし」、その他多くの史詩が一時續出してロマンチックな夢をそゝつた。泣菫の如きはこの趨勢につれて神話の世界を歌つた。(高須芳次郎「日本現代文學十二講」)

英國の童謡集の中に、

母さんが櫻の樹を揺り、  
スウザンがその實を受けとめる。  
その時や、どんなにをかしがる、  
その時や、どんなに楽しがる。  
一つは兄さん、一つは姉さん、  
あとの二つはお母さん。  
お父さんには六つときめて、  
汗も拭かずに扉をたたく。

母親が優しく庭の櫻の樹を揺ると、兒は嬉々としてこぼれ落ちる實を拾ふ。さうして、やがてはその幾箇かを小さい掌に握つて、汗も拭かず大急ぎで、父親の書齋の扉を叩く。平和な家庭の愉樂をさながらに偲ばせる謠である。

(西條八十「詩作の傍より」)

六十二。

Ch. Walter Scott.

白星 平木照雄。千葉縣の人。新體詩人。大正四年歿す。年四十。

鐵幹 與謝野寛。京都の人。歌人。

林外 前田儀作。兵庫縣の人。新體詩人。

岩野泡鳴 名は義衛。兵庫縣の人。大正九年歿す。年四十八。

高須芳次郎 文學者。嘗て梅溪と號す。明治十三年大阪に生まる。早稻田大學英文科出身。

西條八十 文學者詩人。明治二十五年東京に生まる。早稻田大學英文科出身。現に同大學講師。

一二山路

山路を登りながら考へた。

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

住みにくさが高じると、易い處へ引越したくなる。ここへ越しても住みにくい。悟つた時、詩が生まれて、畫が出来る。人の世を作つたものは、神でもなければ鬼でもない。やはり向三軒兩隣に、ちら／＼する唯の人である。唯の人が作つた人の世が、住みにくいからこゝて越す國はあるまい。あれば人でなしの國へ行くばかりだ。人でなしの國は、人の世よりも猶住みにくからう。

越すことのならぬ世が住みにくければ、住みにくい所を

どれ程か寛げて、束の間の命を束の間でも住みよくせねばならぬ。こゝに詩人といふ天職が出来て、こゝに畫家といふ使命が降る。あらゆる藝術の士は、人の世を長閑にし、人の心を豊かにする故に尊い。

住みにくき世から、住みにくき煩ひを引抜いて、有り難い世界をまのあたり寫すのが詩である。畫である。或は音樂も彫刻もである。細かく云へば、寫さないでもよい。只目のあたり見ればそこに詩も生き、歌も湧く。着想を紙に落さずとも、鏗鏘の音は胸裏に起る。丹青は畫架に向かつて塗抹せぬでも、五彩の絢爛は自ら心眼に映る。只おのが住む世をかく觀じ得て、靈臺方寸のカメラに澆季溷濁の俗界を清くうらゝかに收め得れば足る。

この故に、無聲の詩人には一句なく、無色の畫家には尺縑

鏗鏘の音云々 詩想の胸に湧くをいふ。鏗は玉の擦合ふ音、鏘は金石の響。靈臺方寸の云々 心を寫眞機に喩ふ。

なきも、かく人生を觀じ得るの點に於て、かく煩惱を解脱するの點に於て、かく清淨界（清淨の地）に出入し得るの點に於て、又この不同不二の乾坤（乾と坤の地）を建立し得るの點に於て、我利私慾の羈絆を掃蕩するの點に於て、千金の子よりも、萬乘の君よりも、あらゆる俗界の寵兒（寵愛の子）よりも幸福である。

世に住むこと二十年にして、住むに甲斐ある世と知つた。二十五年にして、明暗は表裏の如く、日のある處には屹度影がさすと悟つた。三十の今日は、かう思うて居る。喜の深き時、憂愈、深く、樂みの大いな程、苦みも大きい。これを切放さうとする。身が持てぬ、片付けようとするれば世が立たぬ。金は大事だ。大事なものが殖えれば、寝る間も心配だらう。閣僚の肩は、數百萬人の足を支へて居る。脊中には重い天下がおぶさつて居る。旨い物も食はねば惜しい。少し食へば

不同不二の乾坤 藝術の境地を指す。



(夏目漱石畫讚)

此の畫は、夏目漱石の筆によるものである。其の意匠は、自然の情趣を表現し、生活の静けさを描き出している。鶏や犬の姿は、筆致が簡潔で、力強い。背景の樹木は、墨の濃淡で奥行きを表現している。

飽足らぬ。存分食へば後が不愉快だ。余の考がこゝまで漂流して来た時に、余の右足は突然坐りの悪い角石の端を踏みそこなつた。平衡を保つ爲に、すはやこ前に出した左足が仕損じの埋合せをする。共に、余の腰は工合よく方三寸程な岩の上におりた。肩にかけた繪の具箱が腋の下から躍り出しただけで、幸ひこ何の事もなかつた。

立上がる時に向を見る。路から左の方に、馬尻はぢりを伏せたやうな峯が聳えて居る。杉か檜か分らぬが、根元から頂まで悉く蒼黒い中に、山櫻が薄赤くだんだらに棚引いて、續目が確と見えぬ位霧が濃い。少し手前に禿山が一つ、群をぬきんでて眉に逼る。禿げた側面は巨人の斧で削り去つたか、鋭き平面をやけに谷の底に埋めて居る。天邊に一本見えるのは赤松だらう。枝の間の空さへはつきりして居る。行く手は二



町程で切れて居るが、高い處から赤い毛布が動いて來るのを見る。登ればあすこへ出るのだらう。路は頗る難儀だ。土をならすだけなら、左程手間も入るまいが、土の中には大きな石がある。土は平かにしても石は平かにならぬ。石は切碎いても岩は始末がつかぬ。掘崩した土の上に悠然と峙つて、吾等の爲に道を讓る景色はない。向で聞かぬ上は、乗越すか廻らなければならぬ。巖のない處でさへ歩きよくはない。左右が高く、中心が窪んで、まるで一間幅を三角に穿つて、其の頂點が眞中を貫いてゐると評してもよい。路を行くと云はんより、川底を涉ると云ふ方が適當だ。固より急ぐ旅ではないから、ぶらぶらと七曲へかゝる。

忽ち足の下で雲雀の聲がし出した。谷を見おろしたが、どこで鳴いてるか、影も形も見えぬ。只聲だけが明かに聞える。

足の下で雲雀云々「雲雀より上に休らふ峠かな」  
(芭蕉)

せつせと忙しく、絶間なく鳴いて居る。方幾里の空氣が、一面に蚤に刺されて居た、まらない様な氣がする。あの鳥の鳴く音には、瞬間の餘裕もない。長閑な春の日を鳴きつくし鳴きあかし、また鳴きくらさなければ氣が濟まぬと見える。其の上、どこまでも登つて行く、いつまでも登つて行く。雲雀は屹度雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句は、流れて雲に入つて漂うて居るうちに、形は消えて無くなつて、只聲だけが空の裏に残るのかも知れぬ。

巖角は鋭く廻つて、按摩なら眞逆様に落つる所を、際ごく右へ切れて、横に見おろす。菜の花が一面に見える。雲雀はあすこへ落ちるのかと思つた。いゝや、あの黄金の原から飛上がつて來るのかと思つた。次には落ちる雲雀と上がる雲雀が、十文字にすれ違ふのかと思つた。最後に落ちる時も上

十文字云々 去來の句に、  
「時鳥なくや雲雀の十文字」

がる時も、また十文字にすれ違ふ時にも、元氣よく鳴きつゞけるだらうと思つた。

春は眠くなる。猫は鼠を取ることを忘れ、人間は借金のあつたことを忘れる。時には自分の魂の居處さへ忘れて正體なくなる。只、菜の花を遠く望んだ時に眼が醒める。雲雀の聲を聞いた時に、魂のありかが判然する。雲雀の鳴くのは、口で鳴くのではない、魂全體が鳴くのだ。魂の活動が聲にあらはれたものうちで、あれ程元氣のあるものはない。あゝ愉快だ。かう思つて、かう愉快になるのが詩である。忽ちシェレの雲雀の詩を思ひ出して、口のうちで覺えた處だけ誦誦して見たが、覺えて居る處は二三句しか無かつた。其の二三句のなかにこんなのがある。

前を見ては、後を見ては物欲しと憧るゝかな、われ。

シェレ 英國の抒情詩人。名門に生まれたれど一生不遇にて、一八二二年イタリヤにて歿す。年三十一。その作品には「雲雀」の賦等あり。Percy Bysshe Shelley 雲雀の詩は一八二〇年の作。ここに引用せるは、全篇二十一節中の第十八

腹からの笑といへど、苦みのそこにあるべし。

美しき極みの歌に、悲しさの極みの想、籠るゝぞ知れ。

成程、いくら詩人が幸福でも、あの雲雀の様に思ひ切つて一心不亂に、前後を忘却してわが喜を歌ふわけには行くまい。西洋の詩は無論のこと、支那の詩にも、よく萬斛の愁なごといふ字がある。詩人だから萬斛で、素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると、詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れぬ。超俗の喜もあらうが、無量の悲みも多からう。そんならば、詩人になるのも考へものだ。しばらくは路が平らで、右は雜木山、左は菜の花の見過ぎである。足の下に、時々蒲公英を踏附ける。鋸の様な葉が遠慮なく四方へ伸して、真中に黄色な珠を擁護して居る。菜の花に氣をさらされて、踏附けたあとで、氣の毒なことをした

節なり。  
"Ode to a Skylark"  
We look before and after  
And pine for what is not;  
Our sincerest laughter  
With some pain is fraught;  
Our sweetest songs are  
those that tell of saddest  
thought.

と振向いて見る。黄色な珠は依然として鋸のなかに鎮坐して居る。呑氣なものだ。又考をつゞける。

詩人に憂はつきものかも知れぬが、あの雲雀を聞く心持になれば、微塵の苦みもない。菜の花を見ても、只うれしくて胸が躍るばかりだ。蒲公英も其の通り。櫻も。櫻はいつか見えなくなつた。かう山の中へ来て自然の景物に接すれば、見るものも聞くものも面白い。面白いだけで、別段の苦みも起らぬ。起るとすれば、足が草臥れて、旨いものが食べられぬ位の事だらう。

然し、苦みのないのは何故だらう。只此の景色を一幅の畫として觀、一卷の詩として讀むからである。畫であり詩である以上は、地面を貰つて開拓する氣にもならねば、鐵道をかけて一儲する料簡も起らぬ。只此の景色が、――腹の足しに

もならぬ、月給の補ひにもならぬ。此の景色が、景色としてのみ余が心を樂しませつゝあるから、苦勞も心配も伴なはぬのだらう。自然の力はこゝに於て尊い。吾人の性情を瞬刻に陶冶して、醇乎として醇なる詩境に入らしむるのは自然である。

苦しんだり、怒つたり、騒いだり、泣いたり、人の世につきものだ。余も三十年の間、それを仕通して飽きくした。飽き飽きした上に、芝居や小説で同じ刺戟を繰返しては大變だ。余が欲する詩は、そんな世間的の人情を鼓舞する様なものではない。俗念を放棄して、暫くでも塵界を離れた心持になれる詩である。いくら傑作でも、人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少からう。

どこまでも世間を出る事が出来ぬのが彼等の特色であ

る。殊に西洋の詩になるに、人事が根本になるから、所謂詩歌の純粹なるものも、此の境を解脱すること知らぬ。ごこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場にあるものだけで用を辨じてゐる。いくら詩的になつても、地面の上を駆けあつて、錢の勘定を忘れる暇がない。シエレーが雲雀を聞いて嘆息したのも無理ではない。嬉しい事に、東洋の詩歌にはそこを脱したのがある。

採菊東籬下、悠然見南山。

只それぎりの裏に、暑苦しい世の中をまるで忘れた光景が出てくる。垣の向に隣の娘が覗いて居る譯でもなければ、南山に親友が奉職して居る次第でもない。超然と出世間的に利害得失の汗を流し去つた心持になれる。

獨坐幽篁裏、彈琴復長嘯。

深林人不知、明月來相照。

只二十字のうち、優に別乾坤を建立して居る。此の乾坤の功德は、不如歸や金色夜叉の功德ではない。汽車、汽船、權利、義務、道德、禮儀で疲れ果てた後、凡てを忘却してぐつすりこ寝込む様な功德である。

二十世紀に睡眠が必要ならば、二十世紀に此の出世間的の詩味は大切である。惜しい事に、今の詩を作る人も、詩を読む人も、みんな西洋にかぶれて居るから、わざ／＼呑氣な扁舟を浮かべて、此の桃源に溯るものはない様だ。余は固より詩人を職業にして居らぬから、王維や淵明の境界を今の世に布教して廣げよう。云ふ心掛も何にもない。只自分には、かう云ふ感興が演藝會よりも舞踏會よりも樂みになるやうに思はれる。ハウスより、ハムレットよりも有り難

採菊云々 陶淵明の飲酒二十一首の中の詩に、結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、採菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此中有真意、欲辨已忘言。

獨坐云々 王維の詩、「題竹里館」。

不如歸 徳富蘆花の作れる小説。  
金色夜叉 尾崎紅葉の作れる小説。

桃源に云々 陶淵明の文に「桃花源記」あり。俗界を離れたる仙境に至りしことを記す。  
王維 字は摩詰。盛唐の詩人。  
淵明 名は潛。東晉の詩人。  
ハウス 獨逸の詩人ゲーテの作。  
Hamlet 英國の詩人シェクスピアの作。

く考へられる。かうやつて只一人、繪の具箱と三脚几を擔いで春の山路をのそく、歩くのも、全くこれが爲である。淵明、王維の詩境を直接に自然から吸収して、少しの間でも非人情の天地に逍遙したいからの願一つの醉興だ。

勿論人間の一分子だから、いくら好きでも、非人情はさう長く續く譯には行かぬ。淵明だつて、年が年中南山を見詰めて居たのでもあるまいし、王維も好んで竹藪の中に蚊帳も釣らずに寝た男でもなからう。やはり餘つた菊は花屋へ賣りこかして、生えた筍は八百屋へ拂ひ下げたものと思ふ。かう云ふ余も其の通り、いくら雲雀と菜の花が氣に入つたこと、山の中へ野宿するほど非人情が募つては居らぬ。

こんな處でも人間に逢ふ。びん／＼端折の頬冠や、赤い腰巻の姉さんや、時には人間より顔の長い馬にまで逢ふ。百萬

本の槍に取圍まれて、海面を抜く何百尺の空氣を呑んだり吐いたりしても、人の臭は中々取れぬ。それどころか、山を越えて落ちつく先の今宵の宿は那古井の温泉場だ。

(夏目漱石「草枕」)

元日や一系の天子富士のやま  
絲瓜咲いて啖のつまりし佛かな  
口あいて佐渡が見ゆると涼み覺  
叩かれて晝の蚊をはく木魚かな  
愕然として晝寢さめたる一人哉  
宿かさぬかひこの村や行過ぎし  
花嫁はわらうてばかり茶摘かな  
翡翠や鯉をやしなふ池ひろし  
西瓜太郎躍り出でよと割つて鳧  
戦ぎ交して若葉が喜べる程の風  
大きなる南瓜叩いて遊びけり

鳴雪 子規 紅葉 漱石 碧梧 虚子 紫影 四方太 瓊音 井泉 鬼城

那古井 熊本縣飽託郡小天  
温泉ならんといふ。  
夏目漱石 名は金之助。文  
學博士。東京の人。東京帝  
國大學講師。大正五年歿す。  
年五十。

一三 高瀬舟

いつの頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつたであらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る春の夕べに、これまで類のない珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる住所不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にもたゞ一人で乗つた。

護送を命ぜられて、一緒に舟に乗込んだ同心羽田庄兵衛は、たゞ喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から棧橋まで連れて來る間、此の瘦肉の色、蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおこ

白河樂翁侯 松平定信。

寛政 光格天皇の御宇。(二四四九年)  
知恩院 京都市東山區にある淨土宗の本山。

同心 奉行・所司代・大番頭・書院番頭等の配下に屬し、奥力の下に雜務を掌る職。

なく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな温順を装つて、權勢に媚びる態度ではない。

庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動に細かい注意をしてゐた。

其の日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、やう／＼近寄つて來る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつた頃からは、邊りがひっそりとして、たゞ舳に割かれる水のさゝやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人でも許されてゐるのに、喜助は横

にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで黙つてゐる。その額は晴やかで、目には微かな輝きがある。

庄兵衛はまごもには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにゐる。そして不思議だ、不思議だ、心の内で繰返してゐる。それは、喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねがなかつたなら、口笛を吹き始めるさか、鼻唄を歌ひ出すさか、さうに思はれたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまで此の高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れぬ、併し載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それに此の男は、どうしたのだらう。遊山船にでも乗つたや

うな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其の弟が悪い奴で、それをどんな行掛りになつて殺したにせよ、人の情として、好い心持はせぬ筈である。此の色の蒼い瘦男が、其の人の情と云ふものが全く缺けてゐるほどの、世にも稀な悪人であらうか。さうもさうは思はれぬ。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いや、それにしては何一つ辻褃の合はぬ言語や舉動がない。此の男は、どうしたのだらう。庄兵衛には、喜助の態度が考へれば考へるほど分らなくなるのである。

暫くして、庄兵衛は、泳へ切れなくなつて呼掛けた。

「喜助、お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」と云つて、邊りを見廻はした喜助は、何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを

直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は、自分が突然間を發した動機を明して、役目を離れた應對を求め、いひわけをしなくてはならぬやうに感じた。そこで、かう云つた。

「いや、別に譯があつて聽いたのではない。實はな、先刻からお前の島へ住く心持が聽いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分色々な身の上の人だつたが、どれも、島へ往くのを悲しがつて、見送りに來て一緒に舟に乗る親類の者と、夜ごほし泣くに極つてゐた。それに、お前の様子を見れば、ごうも島へ住くのを苦にはしてゐぬやうだ。一體お前はごう思つてゐるのかい。」

喜助はにつこり笑つた。

「御深切に仰しやつて下さつて、有り難うございます。なる

程島へ住くといふことは、外の人には悲しいことでございませう。其の心持は私にも思ひ遣つて見る事が出来ません。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございませう。京都は結構な土地ではございますが、其の結構な土地で、これまで私の致して参つたやうな苦みは、ごこへ参つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよし辛い所でも、鬼の栖む所ではございませう。私はこれまで、ごこ云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませう。今度お上で島にゐると仰しやつて下さいます。そのゐると仰しやる所に落着いてゐる。ここが出来ますのが、先づ何よりも有り難いこととございませう。それに私は、こんなにか弱い體ではございませう。ついで病氣を致したことはございませう。島へ往つてから、



「ごんなつらい仕事をしたことで、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それから、今度島へお遣り下さるに付きまして、二百文の鳥目を戴きました。それをこゝに持つてをります。」

鳥目 錢の異稱。

かう云ひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ付けられるものには、鳥目二百文を遣すと云ふのは、當時の掟であつた。喜助は語を續いだ。

「お恥づかしいことを申し上げなくてはなりません。今日は今日まで二百文と云ふお足を、かうして懐に入れて持つてゐたことはございませぬ。ごこかで仕事に取附きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それが見つかり次第、骨を惜しまずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりません。それも現金で物が

買つて食べられる時は、私の工面のよい時で、大抵は借りたものを返して、又跡を借りたのでございませぬ。それがお牢にはひつてからは、仕事をせずに食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まぬことを致してゐるやうでなりません。それにお牢を出る時に、此の二百文を戴きましたのでございませぬ。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此の二百文は私が使はず持つてゐるこゝが出来ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふことは、私に取つては、これが始でございませぬ。島へ往つて見ますまでは、ごんな仕事が出来るか分りませんが、私は此の二百文を、島でする仕事の元手にしようと思つてをります。」

かう云つて、喜助は口を噤んだ。  
庄兵衛は「うん、さうかい。」とは云つたが、聴く事毎に餘り意

表に出たので、これも暫く何も云ふことが出来ずに考へ込んで黙つてゐた。

庄兵衛はかれこれ初老に手のさぐく年になつてゐてもう子供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云はれるほどの儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るものの外、寝巻しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸なここには、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は夫の貰ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕かな家に可愛がられて育つた癖があるので、夫が満足するほど手元を引締めて暮して行くことが出来ぬ。動もすれば、月末になつて勘定が足りなくなる。すると、女房が内證で里から金を持つて来て、帳尻を合はせる。それは夫が借財と云ふものを毛

蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふことは、所詮夫に知れずにはゐぬ。庄兵衛は五節供だと云つては、里方から物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては、里方から子供に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を填めて貰つたのに氣が附いては、好い顔はされぬ。格別平和を破るやうなここのない羽田の家に、折々波風の起るのはこれが原因である。

庄兵衛は今、喜助の話をして、喜助の身の上を我が身の上で引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して無くして了ふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし一轉して我が身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれほどの差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに

五節供 正月七日の人日、三月三日の上巳、五日五日の端午、七月七日の七夕、九月九日の重陽。  
七五三 男子は三歳と七歳、女子は三歳と七歳、さに行ふ祝儀。その年の十一月十五日に新衣を着けて氏神に参詣するなり。

過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば算盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有り難がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちは無いのである。

さて桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。其の心持は、こつちから察して遣ることが出来る。併し、いかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慾のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で仕事を見附けるのに苦しんだ。それを見附けさへすれば、骨を惜しまずに働いて、やう／＼口を糊することの出来るだけで満足した。そこで牢にはひつてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられたやうに、働かずに得られるのに驚いて、生まれてから知らぬ満足を覺え

たのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、こゝに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分は、扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一はいの生活である。然るに、そこに満足を覺えたことは殆どない。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしよう、と云ふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取出して来て穴埋めをしたことなどが分ると、此の疑懼が意識の闕の上に頭を擡げて來るのである。

一體此の懸隔は、どうして生じて來るだらう。たゞ上べだけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちには

あるからだ云つて了へばそれまでである。併しそれは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだ。庄兵衛は思つた。

庄兵衛はたゞ漠然と、人の一生といふやうなことを思つて見た。人は身に病がある。此の病がなかつたらと思ふ。其の日其の日の食がない。食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄へがない。少しでも蓄へがあつたらと思ふ。蓄へがあつても、又其の蓄へがもつと多かつたらと思ふ。此のやうに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏止ることが出来るものやら分らない。それを今日の前で踏止つて見せてくれるのが此の喜助だ。庄兵衛は氣が附いた。

庄兵衛は今更のやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此の時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から後光がさすやうに思つた。(森林太郎「森鷗外全集」)

森林太郎 醫學博士・文學博士。鷗外に號す。島根縣の人。陸軍省醫務局長・帝室博物館長・帝國美術院長たり。大正十一年歿す。年六十三。

足音のすれば逃入るあしがにのあなおもしろし鹽は

まの月 (高崎正風)

萩寺のはぎおもしろし露の身の奥津城どころごと

定めむ (落合直文)

くれなるの二尺伸びたる薔薇の芽の針柔かに春のあ

め降る (正岡子規)

寺男とぼくと行くなほゆる、撞木の綱を見かへり

もせで (佐佐木信綱)

遠江大河ながる、國なかば菜のはな咲きぬ富士をか

なたに (興謝野晶子)

快きつかれなるかな息もつかず仕事をしたるのちの

この疲 (石川啄木)

一四 春を待ちつゝ

フランスの旅にある頃、私はパリの客舎に身を置いて、遠く自分の國を振返つて見るやうな静かな時を見つけて、こゝろがよくあつた。わが國における十九世紀といふものに興味を持ち始めたのも、あの旅であつた。

もしわが國における十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があつたら、いかに自分はそれを讀むのを樂しむだらう。明治年代とか、徳川時代とかの區劃はよくされるが、過去つた一世紀を纏めて考へて見ると、そこに別様の趣が生じて来る。まづ本居宣長の死あたりからその時代の研究を讀みたい。萬葉の研究、古代詩歌の精神の復活、國語に對する愛情と尊重の念、それらのものがいかにばかり當時

本居宣長 醫者、國學者。伊勢松坂の人。鈴の屋と號す。享和元(二四六一)年歿す。年七十二。

に目ざめて來た國民的意識の基礎となつたかを讀みたい。一方には、あの時代の初において、喜多川歌麿も歿し、皆川淇園も歿し、上田秋成も歿し、十八世紀風の特殊な藝術が、次第に式亭三馬とか、十返舎一九とか、爲永春水とか、或は歌川派の畫家の群とかの寫實的傾向に變つて行つたことを讀みたい。一方には聖堂を學問の中心として、文藝、趣味、道德の上に支那の憧憬があると思へば、一方には蘭學の研究などが非常な勢で起つてゐる十九世紀の初期を考へると、新舊のものが雜然同棲してゐる。それを委しく讀んで見たい。組織的な西洋の文物を受入れようとしてから、まだ漸く五六十年だ。兎も角もその短期の間に今日の新しい日本を仕上げたといふ人もあるが、それは餘り卑下した考へ方と思ふ。少くも百年以前の前半期をその準備の時代であつたと見な

喜多川歌麿 浮世繪の大家。文化二(二四六五)年歿す。年五十三。  
皆川淇園 儒者・畫家。名は應。文化四(二四六七)年歿す。年七十四。  
上田秋成 國學者。和歌文章をよくす。文化六(二四六九)年歿す。年七十八。  
式亭三馬 小説家。通稱四宮太助。文政五(二四八二)年歿す。年四十八。  
十返舎一九 小説家。本名は重田貞一。天保二(二四九一)年歿す。年六十七。  
爲永春水 小説家。佐々木氏。通稱越前屋長次郎。天保十三(二五〇二)年歿す。年五十四。

ければなるまい。前野良澤とか、桂川甫周とか、杉田玄白とか、大槻玄幹とか、その他、足立左内、高橋作左衛門、伊藤圭助、足立長雋、あゝいふ人達が、來るべき時代の爲に地ならしをしていつた跡を委しく讀んで見たい。頼山陽もあの時代には見のがせない代表的の人物であつたらう。あの人の書いたものは随分混りけの多いものとして、一代の人心を引付けたことは争はれまい。けれども、山陽にはまだ餘程十八世紀風の残つた所がある。渡邊崋山、高野長英、吉田松陰等になつてくるに、何となくそこに武士的新人の型を見る。その情熱においてはより熱烈であり、その思想においてはより實行的であり、その學問においてもより新しいものとなつて來てゐる。反抗、憤怒、悲壯な犠牲精神、あの人達の性格を考へると、どうしても十九世紀でなければ見られないやうな激し

前野良澤 醫師・蘭學者。申津藩に仕ふ。享和三(二四六六)年歿す。年八十一。  
桂川甫周 醫師・蘭學者。幕府に仕ふ。文化五(二四六八)年歿す。年五十九。  
杉田玄白 醫師・蘭學者。文化十四(二四七七)年歿す。年八十五。  
大槻玄幹 醫師。仙臺藩に仕ふ。又幕府の醫書和解御用。天保八(二四九七)年歿す。年五十二。  
足立左内 大阪鐵砲組同心。  
高橋作左衛門 東岡と號す。大阪御定番同心。曆學地理學に精し。文政元(二四七八)年歿す。年四十一。  
伊藤圭助 尾張藩の醫士。植物學の大家。理學博士。男爵。大學名譽教授。明治三十四年歿す。年九十九。  
足立長雋 醫師蘭學者。

い動搖と、神經質と、新時代の色彩を帯びたものがある。そんなことなどが詳しく書いてあつて、それを讀むことが出來たらばと思ふ。わが國の十九世紀は、舊いものが次第に廢れていつて、新しいものがまだ眞實に生まれなかつたやうな時だ。すべての物が統一を欲して叫びをあげてゐたやうな時だ。その中で士族といふ一大階級が滅落していつた。幾何の悲劇がそこに醸されたらう。それを讀んで見たい。長谷川二葉亭、山田美妙齋などの始めた言文一致の仕事、國語の統一といふ上から論じたのも讀みたい。新しい詩歌が僅に頭を擡げたのも漸く十九世紀の末のころである。  
異郷の旅に萌した私の心持は、歸國の後も、長く變らずにあつた。前世紀とは言つても、あの時代に起つて來てゐることは、皆私達に直接關係の深いもののみである。或意味から

天保七(二四九六)年歿す。年六十一。  
頼山陽 歴史家・詩人。名は襄。字は子成、通稱久太郎。天保三(二四九二)年歿す。年五十三。  
渡邊崋山 畫家・蘭學者。名は登。三河の人。天保十二(二五〇一)年自歿す。年四十九。  
高野長英 本姓後藤氏。蘭醫。嘉永三(二五一一)年自歿す。年四十七。  
吉田松陰 萩の藩士。名は矩方、通稱寅次郎。尊王の志士。安政六(二五一九)年刑死す。年三十。  
長谷川二葉亭 小説家。名は辰之助。明治四十一年歿す。年四十六。  
山田美妙齋 小説家。名は武太郎。硯友社同人。二葉亭と共に言文一致運動に功あり。明治四十三年歿す。年四十三。

いへば、私達はそこから出發してゐる。あの暗い時代をもつと探つて見るといふのは、今日の私達に取つても興味の深いことではなからうか。ゴングクウルには日本の浮世繪に關した名著がある。あゝいふ著述が單なる異國趣味でなしに、十八世紀の藝術に寄せた深い興味から作られたといふのは面白い事だと思ふ。もし我が國の十九世紀研究ともいふべきものを書いてくれる人があるなら、過ぐる二つの世紀の間の藝術の比較だけでも、もつと私達の目をあけてくれることが多からうと思ふ。あの歌麿などが、あれほどデカタンの傾向のあつた人にもかゝらず、あの畫にあらはれて居る線や色彩から私達の受取る感じは、あの熟し切つたやうな男女の形態や髪や口唇などから私達の受取る感じは、十八世紀でなければ

ゴングクウル 佛國の小説家。(一八二二—一八九六) Goncourt.

デカタン 衰亡墮落。Decline.

見られないものといふ氣もする。十九世紀の藝術になると、もつと神經質なものがあるやうな氣がする。さういふ比較を讀んで見たい。私達が北齋の畫に見つけるグロテスクの美とも言ひたいものは、一茶の俳句や南北の脚本に見つけるものご何處か共通したやうな性質のものであるか、奈何か。さういふことも讀んで見たい。過去の藝術が靜的な物の表現であるといふことは、よく私達の教へられる所である。さういふ判断に従へば、北齋の畫に現れて居るやうな動きを、あのムーヴマンをどう見たらいいのだらう。江戸時代の藝術家が概して淡泊であり、洒脱であるといふことも、よく私達の教へられる所である。その見方に従へば、小説作者としての馬琴、畫家としての北齋、戯曲家としての南北、詩人としての一茶、あの人達に見るやうな執拗と濃情をどう考

北齋 葛飾氏。名は爲一。浮世繪師。嘉永二(二五〇九)年歿す。年九十。グロテスク 奇異。Grotesque. 一茶 小林氏。俳人。通稱は綱太郎。信濃の人。文政十(二四八七)年歿す。年六十五。

ムーヴマン 運動。Movement.

へたらい、だらう。さういふことも精しく読んで見たい。  
 文學の上から考へて見ても、私達は三馬や一九などの書  
 いたものを、一概に軽く見る先入主な考へ方に捉へられて、  
 はつきりした特色も掴めない。或は前世紀の初期の特色は、  
 南北の戯曲などの方に色濃く現れてゐるやうにも思へる。  
 詩人としての一茶は確に十九世紀初期の人で、その自我を  
 高調したといふ點から見ても、人間の煩惱を憚らずに歌ひ  
 出したといふ點から見ても、あの蕪村などに比べて遙かに  
 近代的であると言へよう。私達は前世紀の初の詩歌を見渡  
 して、桂園派の諸歌人の歌よりも、千蔭の流を汲む人達のそ  
 れよりも、一茶の俳句の方により多く時代の特色を見得る  
 やうな氣もする。しかし、かういふことは、今俄に言つて了へ  
 るものでもない。景樹の歌の中にも、かなり私達の心持に近

桂園派 香川景樹の歌風を  
 繼ぐもの。

いものがある。さういふことが精しく書いてあつて、それを  
 讀むことが出来たらばと思ふ。

若し、さういふ研究を書いてくれる人があるなら、寫生に  
 關したことも讀みたい。文學の上に寫生の唱へられたのは  
 明治になつてからのこと、のやうであるが、それは洋畫の方  
 法から刺戟された寫生論の組織立てられたまでであつて、  
 寫生そのものは、私達の根深い傳統の一つと言つてもいゝ  
 ほど、かなり古くからあつたことを讀みたい。應舉をめぐつ  
 て流れて來た四條派の畫風を擧げるまでもなく、繪畫以外  
 の小説にも、戯曲にも、俳句にも、前世紀の初の藝術の多くが  
 寫生の方法を取入れてゐることを讀みたい。

應舉 圓山氏。寫生畫に巧  
 にして、その流を圓山派  
 といふ。寛政七（二四五  
 四）年歿す。年六十三。  
 四條派 寫生畫派の一派。

善かれ悪しかれ、私達は父をよく知らなければならぬ、  
 その時代をよく知らなければならぬ。若し私の讀みたい



と思ふやうな研究を書いてくれる人があるなら、何程の題目をそこに見出し得るか知れないやうな氣もする。それは當時の人の心を結晶したやうな文學や美術の作品の比較にのみ止るまい。あの諧謔と諷刺とに満たされて居るやうな三馬一九、その他の作者の戲作の中に、當時の平民の道德と虚無的な傾向とを探らうと試みたものは北村透谷であつた。あゝいふことも精しく讀んで見たい。意氣と粹とかの美の觀念が、當時の民衆の間から生まれ来て居ることも注目に値する。武士の階級が次第に墮落して俠客なぞの輩出するやうになつた時、何程當時の一般の人の心が、經濟的にも道德的にも、また精神的にも解放を求めて行つたか、それがまた滑稽文字ともなり戲作ともなつて、奈何に當時の文學の上にはあらはれて來て居るか、さういふことも讀みたい。

北村透谷 文學者。名は門太郎。東京の人。明治二十六年自殺す。年二十七。

たい。

契沖眞淵・宣長、その他先覺者の大きな功績は、古語の研究によつて、幾世紀に亘る支那の模倣的な風潮から自國の言葉を救つた所にあらう、一大反抗の精神の喚起した所にある。あの人達の遺した仕事の大きかつたことに氣づいたのも、やはり私はフランスの旅にあつて我が國を顧みた時であつた。前世紀の初には既に宣長も歿して居ることを思ふと、恐らく當時はその使徒達の時代であつたらう。その中で代表とも見るべき平田篤胤は、國學を神道にまで持つて行つたやうな人で、あの人の歩いた道は、宣長あたりよりずつと窮屈なものといふ氣がするが、當時の人の心に刺戟を與へたことは争はれまい。私は前世紀の初に起つて來た保守的な精神を、單に頑固なものさばかり見ずにもつと別

契沖 國學者。攝津の人。大阪高津の圓珠庵住僧。元祿十四(二三六一)年歿す。年六十二。

平田篤胤 秋田の人。本姓大和田、平田篤樞の養子となる。天保十四(二二五〇)年歿す。年六十八。

な方面から研究されたものを讀みたい。それが盛んな愛國運動となつて行つた跡を讀みたい。この保守的な精神は、吉田松陰等によつて代表されるやうな世界の探求の精神と全く腹ちがひのものであつたらうか。何と言つても前世紀での大きな出来事の一つは明治の維新であらうが、舊制度の打破、民族の獨立、外國勢力への對抗といふことにかけて、前世紀の初から流れて來たこの二つの精神が、相交又し、相刺戟した跡を讀みたい。今日、私達の眼前に展開しつゝあるやうな世界主義と、その反動の大勢とは、早くも前世紀に産聲を揚げた雙生兒であることを讀みたい。

私は少年時代を振返つて見て、自分の物心づく頃から明治二十年頃までの間は、かなり暗かつた時代のやうに思ふ。恐らく西南戦争以前の十年間は、もつと暗かつたらう。私達

は明治維新と共に開けて來た新時代の輝いた方面のみを見るに慣らされて、その慘澹たる光景には兎角眼を塞ぎがちであつた。さういふ真相をも讀みたい。私達がたゞ結果に於いて知り得るやうな父の時代をもつとよく讀みたい。明治の初に生まれて來たものは、文學でも美術でも、徳川時代の末にすら比較し難いほど見劣りのする粗末なものばかりだ。明治維新の齎したものは、その一面に於て、こんな深刻な影響のあることを想ひ見なければならぬ。封建時代の遺物といふ名の下に、あらゆる文化が蹂みにじられはしなかつたらうか。僅に默阿彌の脚本があつて前世紀の中程を飾るのみで、詩も隠れ、繪畫も潜み、あらゆる藝術は一時姿を晦ましたかのやうに見える。さういふ破壊の動いて行つた跡が正しく判斷されてあるものを讀みたい。

實際私達は斯ういふ時代から出發して來てゐる。一概に過去を黄金時代のやうに考へ、今日を頽廢墮落の極と見るやうなことは、私は取らない。今日の青年の激しい精神の動搖を思ふものは、もつとその由來する所を自分等の内部に尋ねて見なければなるまい。(島崎藤村「春を待ちつゝ」)

幕末の志士は必ず何物かを口吟んで居る。藤田東湖の回天詩や正氣歌などは其の尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒泣飢橋本景岳の始知松柏後凋心頼三樹三郎の誰題日本古狂生を始め、佐久間象山でも吉田松陰でも僧月照でも伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、其の心事は永く其の文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつて居る。是等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人々である。其の志を繼いだ人々は明治の世に公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一篇の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。(芳賀矢一「筆のまに」)

島崎藤村 詩人・小説家。名は春樹。明治五年長野縣に生まる。

芳賀矢一 國文學者。文學博士。福井の人。東京帝國大學教授・國學院大學長。昭和二年歿す。年六十一。

### 一五 人生の目的

支那に三不朽の説あり。大上有立德。其次有立功。其次有立言。雖久不廢。此之謂不朽。と曰へるものこれなり。言古しと雖も、其の意は今に新なり。これを智仁勇の達徳に配當せば、立德は仁、立功は勇、而して立言は智なり。立功にも智を要し、立言にも勇を要すれど、その主要なるものを擧ぐれば、各、特色あり。唯現代に於て認むるを難んずるは立德なり。現に立功家及び立言家は少なからず。然れども立德家と稱すべきものを何處に見るか。立功及び立言は全く現實の事にして、過去にもあれば現在にもあり、將來にもあるべく、立德の漠然たるが如くならず。三不朽の中、立德は人の欲求する所の絶頂にして、聖たり佛たるは人生第一の快事なるが如く考へ

大上云々 左傳に出づ。穆叔の語。

智仁勇云々 中庸に、「智仁勇三者天下之達徳也。」

らるれど、遂に帶木の如く之を求めてその影を見失ふに終らん。現代の人の志す所は立言ならざれば立功なり。

魏の文帝曰く、年壽有時而盡、榮樂止於其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。これ文事に與る者の期せずして考へ及ぶ所にして、筆は劍より強し。こいふも、其の旨相近し。ヴォオルテール曰く、功名心あるものにして悉く目的を達し得べくば、悉く文字の人となるべし。ホーマーは傳明かならざれど、傳説に依れば、琴を携へて人の門前に立ち、且謠ひ且語れる者なり。こいふ明を失ひしが上、門附の如く絃歌して錢を乞ひし者ならば、彼も苦痛なる生活を送りしなるべきに、後世之を歎美して已まず、彼の如くんば死すとも可なりとするもの多きは、宜なり。こいふべし。人己の絶佳とする所を全く解せず、外に出でて衆に笑はれ、内に入りて米鹽に窮す

帶木 坂上是則の歌に「曾木の原やふせやに生ふる帯木のありこは見えてあはぬ君かな」(新古今集)

文帝 曹丕。漢の獻帝の讓位をうけて位に即く。文學を好む。

筆は云々 英國の詩人リットンの語。

ヴォオルテール 佛國の文豪。(一六九四—一七七

八) Voltaire. ホーマー 希臘の詩人。西紀前九百五十年頃の人。 Homer.

こ雖も、若し猶自ら信ずること篤くば、當世に屈して後世に伸ぶるあるを以て慰むべし。人間知己少、破硯是良朋。こいへるは、知己の少なくして愈、得意を感じざるなり。

形を異にして情を同じくするは、藝術家と科學家となり。藝術家の製作に従事するは、樂しきか、樂しからざるか、樂しくとも、世間の想像する所とは同じからじ。ミケランジェロの工場に入りし者は、彼の努力に驚かざるなし。夜更けて眠りしかと思へば、突然起きて頭に蠟燭を點じ、夜すがら製作に従事す。シスト禮拜堂の天井畫を完成せし時、絶えず仰ぎ居りしが爲に頸も曲らざりき。こいふ。彼が肉體の満足を事とせず、繪畫及び彫刻に汲々たりしは、苦心慘澹の間に漸く理想に近づく愉快の禁じ得ざるものありしに因りてなり。科學家は天地の美を讚歎せず。世間に美として讚歎する所

人間知己少云々 村上佛山の句。

ミケランジェロ 伊太利の畫家・彫刻家。(一四七五—一五六四) Michele Angelo.

シスト禮拜堂云々 一五〇八年、法王はミケランジェロに囑して、ワチカン宮内のシスト禮拜堂の天井に、舊約聖書中の物語を畫かしむ。刻苦四年にして成る。

も、嚴密に分解し、眼中美もなく醜もなし。ダーウインは自ら歎じて曰ふ、吾はシエクスピアを讀みて少しも興味を感じず。初より感ぜざりしに、あらず、生物の研究を専らにし、遂に之を感じざるに至りしなり。アルキミデスは兵卒に襲はれし時、正に沙上に幾何學の圖を描きて一意研究しつゝあり。兵卒を顧みて曰ふ、暫く待て。問題を決せん。言終らずして殺さる。いづれも傳説にてはあれど、科學家の研究に専らなること往々此の如きものあり。眞に研究を念とするものは必ず別に樂しむ所ありて、常人の樂しむ所と異なり。稱して樂しむといふべからず。んば、他の何物にも代ふべからざる方針を取りて進みつゝありと謂ふべし。

「英雄何必讀書史」は、單に東洋のみならず、何處にも言ひ古したることなり。秦平無事の日には斯く考ふる者多から

一四二  
ダーウイン 英國の生物學者。(一八〇六—一八八二) Darwin.  
シエクスピア 英國の詩人・劇作家。(一五六四—一六一六) Shakespeare.  
アルキミデス 希臘の數學者・哲學者。西紀前三世紀の人。 Archimedes.

英雄云々 清の詩人鄭板橋の句。

ざれど、警報一たび傳はりて多少世間の動搖する時には、風雲に乗ぜんご欲し、出でては將入りては相若し之を併せ得ること困難ならば、せめて其の一を得るの愉快なるべきを思ひ、軍人たらんか、政治家たらんか、遠きは歷山、近きは奈破崙、人生まれて彼の如くなるを得ば、萬死して憾なしとなす。言ふまでもなく天下を掌にし、事として意の如くならざるなきを欲するものなるべけれど、彼等果して世人の想像するが如く愉快を感じたりしか。歷山は天真爛漫、直情徑行、一切の偽善を憎み、波斯に遠征しては、波斯の歡樂に耽りしに似たれど、彼は苟も無道を敢へてせず。當時の社會情態より考ふれば、身を律するの嚴なりしを認めざる能はず。彼の愉快を感じしは富貴にあらず、無上の權を振ふに在りしなり。歳三十にて歿し、能く彼の如きを致したるは偶然にあらず。

歷山 マケドニア王。西紀前四世紀の人。  
Alexander the Great.  
奈破崙 フランス皇帝。(一七六九—一八一二)  
Napoleon Bonaparte.

奈破崙の幸福なるは十七歳までなりといふものあるは、即ち爾後野心に驅られて東奔西走し、一日も心の安寧を得ざりしを指すなり。されど奈破崙の愉快を感じしは、安樂の生活より寧ろ南征北伐の間に存せしにあらずや。肉體に苦痛あれど、己の力を伸ばし得る處に満足を感じたりしならん。彼は一種の理想に生き、之に近づくを以て満足せしもの。その羅馬を模範とし、世界の地圖を改め、永遠の平和を計れる、實に時代を超越せる觀あるもこれが爲なり。その遠洋の孤島に流さるゝや、居常鬱々たりきこはいへ、自ら古の英雄に比較して満足を感じしもの如し。彼は不可能を追求して智囊を絞りし爲に、何れの邊まで人智を働かし得るかを示し、英雄は古代に限らず後世の人にもなほ克く古英雄を凌ぐものあるを證明せり。

青年の功名に急なるものは政治家たらんことを希望するもの多し。何れの國にも法政の學を修むるもの多きは、官吏となり銀行、會社員となる外、比較的功名心を満たすべき門戸の開かれ居るが故なり。山高ければ麓廣し。高き位置を望むが故に麓に集る者の多きなり。されど高き位置に上れる政治家に何の快樂あるかといへば、世俗の所謂快樂を得ることは甚だ少なし。後世に欽慕せらるゝ者は特に然り。奈破崙に對抗して英國の權威を維持せしウイリヤム、ピットは獨身にして、國家を以て妻と稱し、收入を擧げて政治の事に投じ、爲に負債山の如くなりき。伊國の建設に當り、獨り國政の整理に任せしカヴールは、同じく國家を以て妻と稱せり。大いに富み大いに驕らずんば高き位置を占むる效なしといふ者あれど、かゝる事に歡樂を求むるの徒

ウイリヤム、ピット 英國の政治家。(一七五九—一八〇六)  
William Pitt

カヴール 伊太利の政治家。(一八一〇—一八六一)  
1) Cavour.

は、政界に飛ぶことも僅に蝙蝠の飛ぶが如かるべし。大政治家の愉快は、我が施設の效顯れ、幾分にも國家社會の進善せんとするを見るに在り。古代にては諸葛孔明の如き、又マルクス、オーレリウスの如き、これのみ。

器械の應用は近世に入りて加速度の進歩を遂げ、商業、工業、農業は之が爲に重きを加へ、嘗て立功家として軍人及び政治家を推したるもの、今は之に商業家、工業家、農業家等を加へざるべからざるに至れり。貧困は發明に必要ならず。されど新發明、新工夫の記録は、半面より觀て貧困との争闘なり。パリッシーの如きは一の極端なる例とすべし。實際に於て、後人を感じせしめ、努力せしむるものは、一切を放擲して事に専らなりし者の傳記にして、其の事業としての直接利益の外、間接に人心に益する所多し。後人の發憤するは、富貴

諸葛孔明 蜀の劉備の臣。  
マルクス、オーレリウス  
羅馬の皇帝。(一三一—  
一八〇) Marcus Aurelius.

パリッシー 佛國の陶工。  
西紀十六世紀の人。  
Bernard Palissy.

にして歡樂に耽る所に在らず、實に己の爲すべきを信じ、斃れて後已まんとする所に在り。爲に人は往々立德の事に考へ及ぶ。

帝王は一世の尊、而も孔子の廟に跪き、釋迦の寺に跪き、耶蘇の會堂に跪けり。個人の勢力にして最も廣く最も久しく影響の及ぶべきものを擧ぐれば、かく帝王を跪かしむる立德家なりとすべく、隨つて志の大なる者の以て人生の最大快事とするは、之に彷彿たるに在り。されど彼等がたごひ能く立德家の如くなるを得たりとすも、果して愉快なるを得べきか。功名心の熾なるものは、後世に於ける勢力の孔子、釋迦、耶蘇の如くなるを欲しつゝ、現在に於て孔子、釋迦、耶蘇の如き不遇又は不快なる生活を送るを欲せざるべし。もご立德は人生の美點を綜合して考へたるもの、人生の完成を

以て衆徳を具ふるにありとし、暫く史的人物を藉りて之に充てたるのみ。人生最上の目的は立德なり。雖も、立德家たらんには如何にせば可なるかといへば、容易に解答は與へ難し。

それ立德は高嶺の月なり。而して麓の路の最も主要なるものは、實に立言及び立功に在り。立言の方向には詩あり、文あり、藝術あり、科學あり。立功の進路には軍事あり、政治あり、商業あり、工業あり、農業あり。之を細分すれば頗る多數に上るべけれど、其の孰れかを念とし、十分にその能力を伸ばさば、幾許か立德たるを得ん。分けのぼる麓の路は多けれど、同じ高嶺の月を見る。健脚なる者は麓にありて百花の咲亂るるを觀て満足せず、必ずや蒼空を凌がんことを期す。歡樂は麓にあり、安樂は麓にあり。日常の愉快は悉く麓にあり。され

分けのぼる麓の路は多けれど同じ高嶺の月を見るかな 道歌。

ば他人より身體の強健にして、女兒の樂しむ所の外に出でざるを聊か物足らず覺ゆる者は、時に餓を忍び、寒に堪へ、絶頂に至りて千里一望の快を恣にせん。或はアルプスを低しとし、全く人跡を絶てるヒマラヤ山に登らん。企つ。而して若し幸ひにその上に立たんか、千古の氷雪萬里に互るを見て、壯絶、快絶、壯絶々を叫ばん。女兒も之を聞いて地球の最高處に立つの如何に愉快なるかを想像し、唯己の企て及ばざるを歎ぜん。蓋し形而下の快事は多數の求むる所にして、形而上の快事は少數の求むる所なり。而も求むること求めざるとの差こそあれ、形而上の快事を以て人生の最大快事なりと認むるは、古今に通じ東西に互りて動かすべからざる事實なり。(三宅雪嶺の文による)

三宅雪嶺 文學博士。評論家。萬延元年、金澤に生まる。



### 一六 文化の威力

歐洲に於ける近時の傾向は、自我の意識が強烈となつたことである。この自我はその本領を發揮しようとして、一切のものより解放せられた自由を求め、こゝに於て現實感が旺盛となり、現代人は最も強く現實生活に執著するに至つたのである。この強烈な現實感は、現實的な直接な經驗によらなくては満足されないのである。その現實經驗の何たるかを解釋説明するものは、即ち經驗的な科學である。

蓋し、科學特に自然科學は自由精神の所産であつて、自然と人間との兩者を分離し、單に當面の事實として、これを率直に、公平に、著實に、明白に觀察し研究しようとするものである。この自然科學の研究は著々として功を收め、天地間の

科學 假定の上に立ちて、特殊なる現象の原理に關し、概括して系統的に論述證明する學。之を研究事項によりて自然科學・精神科學の二つに分つ。

何物も、この科學の威力には對抗し得ず、遂に科學萬能の世となつた。こゝに於て一切の自然現象は勿論、人事百般の事も悉く科學的に考察し説明されなければならぬやうになり、苟も科學的でないものは空想若しくは迷妄として排斥されるやうになつた。これが自然主義の横行するに至つた所以である。

自然科學の方法と成果とから人間を觀る時は、人間は單なる自然物であり、機械的な必然の法則に支配され、やがて亡びゆく運命を有するものと見做されざるを得ないのである。かくては人格の價値も自由も認められないで、現代的意識の痛切に要求する所とは矛盾を生じ、こゝに痛ましい悲哀を感じざるを得ない。然るに、この窮境を切脱ける爲に、自由の要求は一轉して力の崇拜となつた。既に人間は他の

自然主義 自然科學の考察を基礎として、あらゆる問題を解かんとする主義。

自然物と同様に機械的因果法則に従ふものとすれば、量的に大いに強い力を發揮すべきであつて、人間の價値は唯能率の如何によつて定まることとなつた。近時能率又は成功の偏重されるのは、かゝる自然主義からの必然の歸結であつた。

力を崇拜し能率を重んずる點から觀て、最も效力があると思はれたものは、自然科学の應用から産出される諸般の技工であつた。科學の進歩は直ちにその應用を見出し、自然力を利用して工藝、産業、醫術、兵器等の方面に於て實に偉大な業績を擧げ、人目を愕かすに至つた。世にこれを文明と稱し、文明の進歩は人間生活を豊富にし、能率を増加し、隨つて福利を増進するものと考へられ、世は擧つて科學的文明の徳を謳歌して止まないやうになつた。而して文明が進むに

従つて人間は益、その力を發揮し、益、多くの幸福を得、現代意識の要求するものは悉く充されて尙餘りあるやうに思はれた。然るに事實はこれに反し、世は文明の進歩を謳歌する間に、現代人は益、矛盾に苦しみ、煩悶、懊惱の狀を免れないやうになつた。これは果して何に由るのであらうか。

こゝに於て、所謂文明と文化との別を明かにする必要を生ずる。蓋し、自然科学の應用より來る所謂文明は、實に技工そのものであつて、眞の文化と稱すべきものではない。如何に電燈を輝かし、自動車を馳せ、飛行機を飛ばしても、單にそれのみでは眞の文化とはいはれない。所謂文明即ち技工は、如何なる場所にでも移植することが出来る。しかし文化は決してさうは行かない。自然に對していふ時は、技工も文化も共に等しく或價値目的によつて導かれた人間の活動か

ら生ずるものではあるが、技工は或目的の爲に作られた個の製作であり、文化は此等の製作の單なる羅列ではなくて、其の間に統一が無ければならないものである。文化的産物はその生活領域から引離されず、生活そのものに形状と色彩とを與へるものである。若しこの文化統一を缺く時は、個々の産物と個々の人々とは互に相離れ、人格的で且つ同時に實質的である所の全體的價値は無くなるのである。技工の誇とする所は、自然を服従せしめ、これを結合し支配して或目的の爲に働かしめるに在る。即ち自然を征服する力を意味するのである。故に、人と自然とは互に相敵對する觀があるが、文化は人格的統一であるから、敵對せしめず人間を高めて世界全體と一致せしめる。随つて、人間はもはや自然の一部分とは感じなくなる。こゝに至れば、人間は固よ

コスモス 渾一。調和の意。  
Cosmos

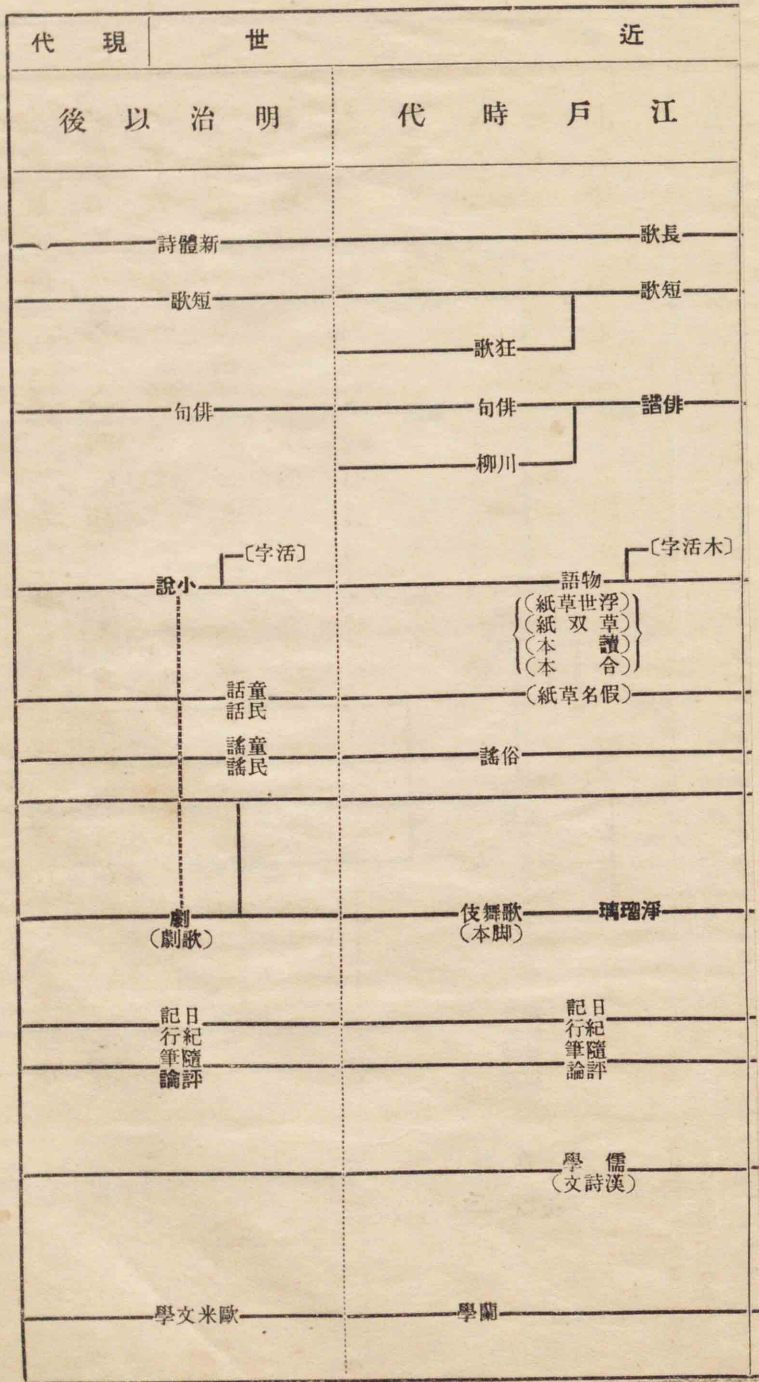
り技工の産物を所有はするが、決してその爲に囚れることは無い。人間は器械的の外面的支配によつて世界と結合するのでは無くして、最も親密に且つ深く内面的に世界と一致融合するやうになる。技工の世界は渾沌であるとするれば、文化の世界はコスモスである。又技工の世界は力であるとするれば、文化の世界は價値である。かくの如く觀れば、自然科学の應用から生ずる技工的文明は、文化統一の中に攝取されて始めてその價値を得來るものであつて、單に技工のみでは文化を進める所以のものではない。又文化的統一があつて始めて技工的文明は成立ち得るのである。

然るに世間には、動もすれば技工的文明を以て直ちにこれを文化と見做さうとする人がある。誠に淺薄な皮相の見こいふべきである。かの自然主義の立場は皮相的な外面觀

に止るから、これに依つて深く文化の眞義を察することは出来ぬ。随つて單に自然主義に止る時は、離れくゝな特殊状態のみを見て内面的統一を失するが故に、それが人をして矛盾と混亂と疑惑とに陥らしめることは、多言を要せずして明かである。これを救ふには文化の眞義を明かにし、文化の威力によつて自然主義を克服することを要するのである。文化を進め文化の威力を盛んならしめることは、文化を深めることに由つて成されるのである。而して文化を深めることは統一的な文化意識を深めることに由つて成される。文化意識が深められ明かにされて、始めて科學も藝術も道德も宗教も政治も經濟も、皆その眞義と價值とを發揮するやうになるのである。(得能文の文による)

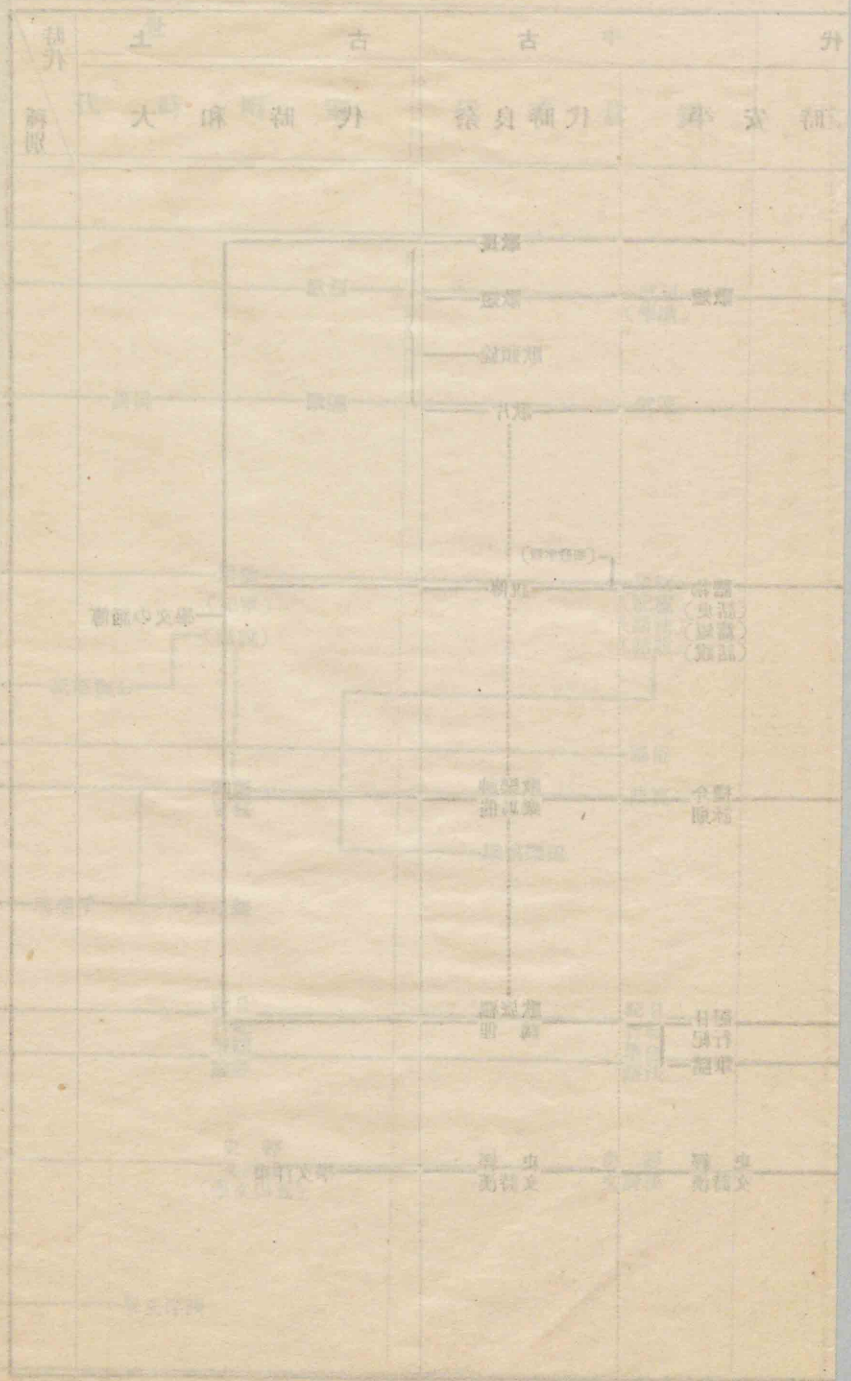
得能文 哲學者。文學博士。  
東京高等師範學校教授。

國文學形態史圖表 (國文選附錄)





代 現	世	近	世	中	代	古	古
後 以 治 明	代 時 戶 江	代 時 町 室	代 時 倉 鎌	代 時 安 平	代 時 良 奈	代 時	代 時
詩體新		歌長				歌長	
歌短	歌狂	歌短	歌短	歌短 (學歌)	歌短	歌短	
句俳	句俳 柳川	諧俳	諧俳	歌連		歌頭旋	
						歌片	
說小	[字活]	語物 (紙草世浮) (紙双草讀) (本本合)	語物 (記軍) (話説)	語物 (記軍) (話法) (話説)	語物 (話史) (篇短) (話説)	[明發字假]	說傳
話童 話民 謠童 謠民	(紙草名假)	紙草伽お	曲謠 言狂	謠俗 曲宴	樂猿樂田		歌樂神 樂馬催
劇 (劇歌)	伎舞歌 (本脚)	璃瑠淨	璃瑠淨	本の舞			
記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨 論評	記日 行紀 筆隨		歌旅羈 謠徂
	學 儒 (文詩漢)	史 經 文詩漢 (學文山五)	史 經 文詩漢	史 經 文詩漢	史 經 文詩漢		史 經 文詩漢
學文米歐	學蘭	學文洋西					學文洋東



國文學年表下 (國文選附録)

天皇 (御在位)	文學者 (歿年)	著作物	雜
高倉 (八二八—八四〇) 嘉應 承安 安元 治承	(歌) 平忠度 (八四七)	千家集 (八七七)	平氏亡ぶ (八四五) 源賴朝幕府を鎌倉に開く (八四六)
安養和 壽永 元曆 建久 後鳥羽 (八四一—八五八) 文治 建久 一八五〇	(歌) 西行法師 (八五〇)	山家集 千五百番歌合 (八六二) 新古今集 (八六五) 水鏡 今鏡 住吉物語	
土御門 (八五八—八七〇) 正治 建仁 承元 建永	(歌) 藤原俊成 (八六四)	方丈記 金槐集	
順德 (八七〇—八八二) 建曆 建保 承久 建久	(文) 鴨長明 (八七九) (歌) 源實朝 (八七九)	保元物語 平治物語 平家物語 源平盛衰記	
仲恭 (八八二—八九〇)	(歌) 慈鎮和尚 (八八五)		
後堀河 (八九〇—八九三)			

貞應 元仁 嘉祿 貞永 寬喜 貞永 條(九三—一九〇) 天福 文曆 嘉禎 曆仁 延應 仁治 一九〇〇	(歌) 藤原定家(九二)	貞永式目(八九二) 新勅撰集(八九四)	
嵯峨(九三—一九〇六) 寬元		詠歌大概 東關紀行 撰集抄 宇治拾遺物語 今物語	
後 深草(九六—一九九) 寶治 建長 康治 正嘉 正元		續後撰集(九二二) 十訓抄(九三三) 古今著聞集(九二四)	
龜 山(九九—一九四) 文應 弘長	(歌) 藤原爲家(九三五)	續古今集(九五五) 吾妻鑑(九七七)	
後 宇多(九七—一九四七) 建治 弘安 見(九七—九六)	(歌) 阿佛尼(九四三)	續拾遺集(九三八) 十六夜日記	
伏 見(九六—九六) 正應 永仁 一九五〇		中務内侍日記 野守鏡(九五五)	
後 伏見(九六—九六) 正安 乾元 嘉元	(歌) 飛鳥井雅有(九六)	新後撰集(九六三)	

德治 延慶 圓(九六—九七) 應長 正和 文保	(歌) 藤原爲相(九八)	玉葉集(九七)	建武中興(九四)
後 醍醐(九六—九六) 元應 元亨 正中 嘉曆 元德 元弘 建武 延元		續千載集(九八)	
(光 嚴) 正慶			
(光 明) 曆應 康永 貞和			
後 村上(九九—二〇〇) 興國 正平 二〇〇〇		建武式目(九八) 神皇正統記(九九)	
長 慶(二〇三—二〇四) 建德 文中 天授 弘和	(學) 北兼好惠法親房(二〇四)	風雅集(二〇三) 增鏡 徒然草	足利義滿將軍なる(二〇六)
(崇 光) 親應			
(後 光 嚴) 文和 延文 康安 貞治 應安		苑玖波集(二〇六) 新千載集(二〇九)	
後 龜山(二〇三—二〇五) 元中	(歌) 頼阿法師(二〇五)	連歌新式(二〇七) 華葉集(二〇八)	



(後) 圓融 永和 康曆 至德 嘉慶 康應 明德 (後) 小松 二一五〇	(詩) 二條 義基 (二四八) 近後拾遺集 (二四四) 近來風體抄 (二四七)	太平記 吉野拾遺 言塵集 (一〇六) 忍音物語	觀世清次歿す (一〇六) 足利義政將軍となる (二〇九) 觀世元清歿す (二二五) 東常縁古今傳授を宗祇に傳ふ (三三二)
後 小松 (四五—一〇七) 應永 稱 光 (〇七—一〇八) 正長 後 花 園 (〇八—一〇九) 永享 嘉吉 文安 寶徳 享徳 康徳 長祿 寛正 二一〇〇	(歌) 僧 絶 海 (一〇七) 今川貞世 (一〇八)	連歌新式追加 (三三二) 曾我物語 義經記 中書王物語 水無瀬三吟百韻 (二四八)	新苑玖波集 (二五五) 連歌新式今案 (二六二) 大筑波集 (二七四)
後 土御門 (二四—一〇三) 文正 應仁 延徳 長享 明應 二一五〇	(歌) 僧 正 徹 (三二八) 一心 敬 都 (三三五) 田條 兼 良 (三四一) 道 灌 (三三六)	淨瑠璃姫物語 御伽草子 守武千句 (二一〇) 詠歌大概抄 (三三六)	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版
後 奈良 良 (二六—一〇七) 享祿 天文 弘治 二二〇〇	(連) 牡丹 花 宵 柏 (三八七) 三條 西 實 隆 (三九七)	犬子集 (三五九) 油糟 (三五九) 醒睡笑	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版
正 親 町 (二七—一〇六) 永祿 元龜 天正 二二〇〇	(俳) 荒 木 田 守 武 (三九九) 山 崎 宗 鑑 (三九九)	可笑記 (三九〇) 俳諧御傘 (三九一) 因果物語 (三九二)	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版
後 水 尾 (三七—一〇九) 元和 寛永 二二五〇	(連) 細 里 川 幽 紹 (三九〇) 齋 巴 (三九〇) 藤 原 昌 惺 塚 (三九六)	可笑記 (三九〇) 俳諧御傘 (三九一) 因果物語 (三九二)	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版
明 正 (三九—一〇三) 二二〇〇	(儒) 中 江 藤 樹 (三九八) 水 下 長 嘯 子 (三九八) 松 永 貞 徳 (三九三)	可笑記 (三九〇) 俳諧御傘 (三九一) 因果物語 (三九二)	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版
後 光 明 (四〇—一〇四) 正保 慶安 承應 二二〇〇	(俳) 鈴 木 正 三 (三九五) 山 (三七七)	可笑記 (三九〇) 俳諧御傘 (三九一) 因果物語 (三九二)	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版
後 明 曆 萬治 寛文 二二五〇	(小) 鈴 木 正 三 (三九五) 山 (三七七)	可笑記 (三九〇) 俳諧御傘 (三九一) 因果物語 (三九二)	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版
靈 元 (三三—一〇七) 延寶 天和 貞享 二二五〇	(俳) 西 山 宗 因 (三四二) 下 河 邊 長 流 (三四六)	可笑記 (三九〇) 俳諧御傘 (三九一) 因果物語 (三九二)	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版
東 元 祿 寶永 二二五〇	(國) 西 山 宗 因 (三四二) 下 河 邊 長 流 (三四六)	可笑記 (三九〇) 俳諧御傘 (三九一) 因果物語 (三九二)	徳川家康幕府を江戸に開く (三三三) 家康林羅山を幕府に召す (三三六) 古書出版

光 天和 享和 文化 二四五〇	後 桃 安永 格(四三九—四七七)	後 櫻 明和 町(四三三—四三三〇)	桃 寛延 寶曆 園(四二七—四三三)	櫻 元文 寛保 延享 町(三五五—四〇七)	中 御門(三六九—三九五) 正徳 享保
俳 詩 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇
詩 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇
詩 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇	俳 俳 大窪 窪島 詩 佛 太 佛 二四五〇

孝 嘉永 安政 文久 慶應 明(五〇六—五二六)	仁 文政 天保 弘化 孝(四七七一—四五六)	文 村 田 春 海 (四七一)	國 上 田 秋 成 (四六九)	狂 荒 藤 千 蔭 (四六六)	歌 唐 木 田 洲 (四六六)	歌 荒 唐 木 田 洲 (四六六)	國 上 田 秋 成 (四六九)	狂 荒 藤 千 蔭 (四六六)	歌 唐 木 田 洲 (四六六)	文 村 田 春 海 (四七一)
小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 曲 世 川 馬 琴 (五〇八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)
小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)
小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)	小 山 櫻 井 梅 室 (五二八)



